

須 長 10 号 墳

2014

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第184集

す な が じ ゅ う ご う ふ ん
須 長 10 号 墳

2014

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

新城市は、愛知県東部に位置します。市域の南部、東部は県境にあたり、静岡県と接しています。四季のはっきりした気候による農業、観光事業などとともに、近年では豊橋市周辺のベッドタウン的な役割も担ってきました。

須長 10 号墳が位置する新城市周辺では、原始の時代より我々の祖先による生活が営まれてまいりました。このことは、周辺地点で確認されている遺跡、過去の発掘調査結果が物語っています。

新城市須長地区では、このたび中日本高速道路株式会社によって、第二東海自動車道横浜名古屋線が建設されることとなりました。（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて、中日本高速道路株式会社からの委託を受け、工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、古墳時代終末期の円墳を中心とした遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供することができました。

調査にあたりまして、中日本高速道路株式会社、愛知県教育委員会、新城市教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域の皆様から多大な御協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成 26 年 3 月 31 日

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 加 藤 高 明

例 言

- 1 本書は愛知県新城市須長字天王地内に所在する、須長 10 号墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、中日本高速道路株式会社による第二東海自動車道建設工事に伴う事前調査として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査総面積は 1200m²である。
- 3 発掘調査は、平成 22 年 1 月～3 月に実施した。さらに平成 24 年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
- 4 現地における発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センター調査課調査研究専門員・松田 訓、同調査研究主任・早野浩二、同調査研究主事・亀甲真史(現愛知教育大学付属特別支援学校教諭)が担当し、大成エンジニアリング株式会社に調査事業の支援を依頼した。
- 5 調査にあたっては、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、新城市教育委員会をはじめとして多くの関係諸機関の御協力を得た。
- 6 本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担(詳細は目次参照)は以下の通りである。
第 I～IV 章・第 VI 章＝松田 訓、第 V 章＝パレオラボ株式会社 AMS 年代測定グループ(伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子)
- 7 報告書の作成については松田 訓が担当し、遺物の実測、トレース、図版の編集等は、文化財サービス株式会社に委託し、松田の指示にてこの作業を行った。
- 8 本書掲載の遺構写真は大成エンジニアリング㈱、遺物写真は写真工房 遊に撮影を委託した。
- 9 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠し、「世界測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度(T.P.)の数値である。
- 10 本書で示す土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。
- 11 本書中の各遺構名については、以下のアルファベットによる分類記号を調査時のまま使用した。
SK:土坑 SD:溝、SZ:墳墓、SX:その他の遺構
- 12 遺物の整理番号と登録番号の対象は、表として添付の CD に収録した。
- 13 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
- 14 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
- 15 本書の作成にあたり、城ヶ谷和広氏には遺物の解釈において、多くのご指導を得た。

さらに本遺跡の調査、報告にあたって、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。

(五十音順、敬称略)

浅田博造 伊藤秋男 岩原 剛 北村和宏 都築暢也 森 泰通 余合昭彦

愛知県埋蔵文化財調査センター 新城市教育委員会 豊橋市教育委員会

目 次

第Ⅰ章	調査の経緯	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	
第1節	遺跡の位置	2
第2節	歴史的環境	4
第3節	調査区	6
第Ⅲ章	遺構	
第1節	基本層序	7
第2節	遺構	10
第Ⅳ章	遺物	
第1節	概要	26
第2節	主要遺構別出土遺物	26
第Ⅴ章	自然科学的分析	
第1節	炭化材の樹種同定	35
第2節	放射性炭素年代測定	38
第Ⅵ章	総括	44

図 表 目 次

挿 図 目 次

第1図	新城市位置図	2
第2図	遺跡周辺地形図	3
第3図	周辺遺跡分布図	5
第4図	関連遺跡位置図	6
第5図	調査地位置図	6
第6図	調査区西壁部分断面図	7
第7図	調査前地形測量図	8
第8図	調査区遺構平面図	9
第9図	墳丘平面・東西断面図	11
第10図	墳丘南北断面図	12
第11図	石室平面・立面図	14
第12図	墓域平面・断面図	15
第13図	墓域断面図	16
第14図	石室検出平面図	17
第15図	石室天井石・転落石除去平面図	17
第16図	石室附墓石除去平面図	18
第17図	石室敷石検出平面図	18
第18図	石室基底石・墓域平面図	19
第19図	101SI 及び 105SK 平面・断面図	22
第20図	102SI 平面・断面図	23
第21図	103SI 及び 104SK 平面・断面図	24
第22図	107SK 平面・断面図	25
第23図	出土遺物実測図 (1)	29

第24図	出土遺物実測図 (2)	30
第25図	出土遺物実測図 (3)	31
第26図	出土遺物実測図 (4)	32
第27図	出土遺物実測図 (5)	33
第28図	出土遺物実測図 (6)	34
第29図	出土炭化材の走査電子顕微鏡写真	37
第30図	試料No.1 暦年校正曲線グラフ	41
第31図	試料No.2 暦年校正曲線グラフ	41
第32図	試料No.3 暦年校正曲線グラフ	42
第33図	試料No.4 暦年校正曲線グラフ	42
第34図	試料No.5 暦年校正曲線グラフ	43
第35図	須長古墳群位置図	44
第36図	須長10号墳石室模式図	45
第37図	石室比較図	47

表 目 次

表1	樹種同定結果	35
表2	測定試料および処理	38
表3	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	39

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

調査地点は、愛知県新城市須長字天王に位置する。愛知県教育委員会が1990年に発行した愛知県遺跡分布地図・東三河地区版には、古墳時代後期の古墳群として、今回の調査地点周辺に須長1～10号墳が記載されている。この中で須長10号墳の記載範囲内に、中日本高速道路株式会社によって第二東海自動車道横浜名古屋線建設工事が行われることとなった。工事に先立ち、遺跡の有無について愛知県教育委員会と新城市教育委員会により確認調査が行われ、あらためて墳丘が確認された。このため平成19年度には愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターに遺跡の範囲確認調査が委託され、周辺では須長10号墳以外に新たな墳丘は確認されなかった、と報告された。

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターでは、中日本高速道路株式会社から愛知県教育委員会を通じて工事に先立つ発掘調査の委託を受け、平成22年1月よりこれを実施した。総調査面積は1200m²である。

第2節 調査の経過

調査区は第二東海自動車道建設予定地内にて、須長10号墳とその周辺を一括して設定した。この調査区の外縁部も含めて、平成21年11月6日に調査前の地形測量を行う。

平成22年1月7日に重機の搬入を行い、同日より表土ハギを開始した。1月21日には重機による表土ハギを終了し、遺構検出と掘削を開始した。1月22日には墳丘にベルトを設定しこれに沿ったトレンチ掘削を開始し、1月29日に周溝の掘削を開始した。2月4日には墳丘覆土の掘り下げを始め、2月23日に石室の埋土掘削を開始した。

調査途中の2月27日には遺跡説明会を予定して準備したが、前日からの荒天により進入路等が危険な状態であったため、開催を中止する。

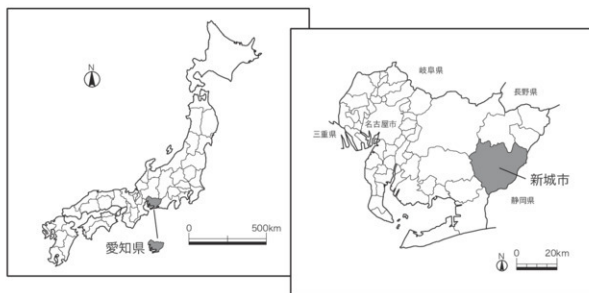
3月10日からは石室の床面直上より、埋土の篩掛けを行いながら掘り下げをすすめた。3月11日には石室の天井石を除去し、3月12日には石室奥壁の鏡石まで検出した。3月17日には調査区の航空撮影を行い、3月20日には石室側壁を取り外し、3月26日に石室基底石を検出した。3月29日に石室墓壙を完掘し、平成22年3月30日に埋め戻し、資材撤去作業を終了した。

3月27日には、近接して当センターが調査を行っていた石座神社遺跡の遺跡説明会場にて、須長10号墳の展示コーナーを設けた。会場では、調査写真のパネルや出土遺物を展示することにより、2月に中止となった遺跡説明会での公開を補った。

出土遺物の整理作業は、調査中、調査後に洗浄作業を行い、引き続き平成24年度に報告書作成までの作業を行った。

第 II 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置



第 1 図 新城市位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では西側が尾張国、東側が三河国にあたる。須長 10 号墳の位置する新城市は、愛知県東部にあたる三河地域のほぼ東端に位置し、三河湾の最奥部に注ぐ豊川河口から上流に 20km ほど遡った位置から市域を展開する。

現在の新城市域は、先年まで旧新城市、南設楽郡鳳来町、同作手村に分かれていた。平成 17 年 10 月の合併以降は、県内では豊田市に次ぐ面積の自治体となった。市域は北側で北設楽郡東栄町、同設楽町と接し、西側で豊田市、岡崎市、豊川市、南側では豊橋市と接する。市域の南東側は静岡県との県境にあたり、浜松市天竜区、北区と接している。

一級河川豊川は、市域の南側で中央構造線に沿って流れ、北東から南西に向かい三河湾に注ぐ。したがって新城市域は、日本最長の断層帯である中央構造線によって、北西側がその内帯に、南東側は外帯へと分割されている。中心となる新城市街地は、豊川によって形成された中位段丘面に展開しており、その大半は豊川右岸に属する。須長 10 号墳は、この市街地から北東約 5 km の中央構造線内帯側に所在し、雁峯山南麓に広がる丘陵上に位置する。

市域の気候は、緯度が低いこともあり比較的温暖だが、盆地性地形であるため日較差が大きい。このような気候は各種栽培に適することから、農業が盛んである。



第2図 遺跡周辺地形図(国土地理院1:20万地勢図「豊橋」)

第2節 歴史的環境

須長 10 号墳は、古墳時代終末期の円墳および堅穴建物跡、縄文時代早期の可能性ある土坑、中近世の遺物も確認された複合遺跡であるが、出土遺物の主体は古墳から出土した須恵器であった。

『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）東三河地区』の記載によれば、埋蔵文化財包蔵地として旧新城市内に分布する地点は 277 ヶ所、同じく旧鳳来町に分布する地点は 71 ヶ所、旧作手村に分布する地点は 35 ヶ所が確認（滅失地点含む）されている。ここでは、調査地周辺に分布する遺跡のうち、須長 10 号墳が位置する旧新城市北東部から旧鳳来町との境界付近に視点を据え、その歴史的環境を時代ごとに概観する。

須長 10 号墳周辺で確認できる遺跡は、古いものでは旧石器時代から縄文時代の遺物が確認された萩平（下の段、上の段）遺跡があり、調査地点からは南方向約 2km に位置している。昭和 30 年代には既に試掘調査が行われており、旧石器時代の各種石器や縄文早期にあたる土器片も検出され、市内の代表的な旧石器時代遺跡として市指定史跡となっている。

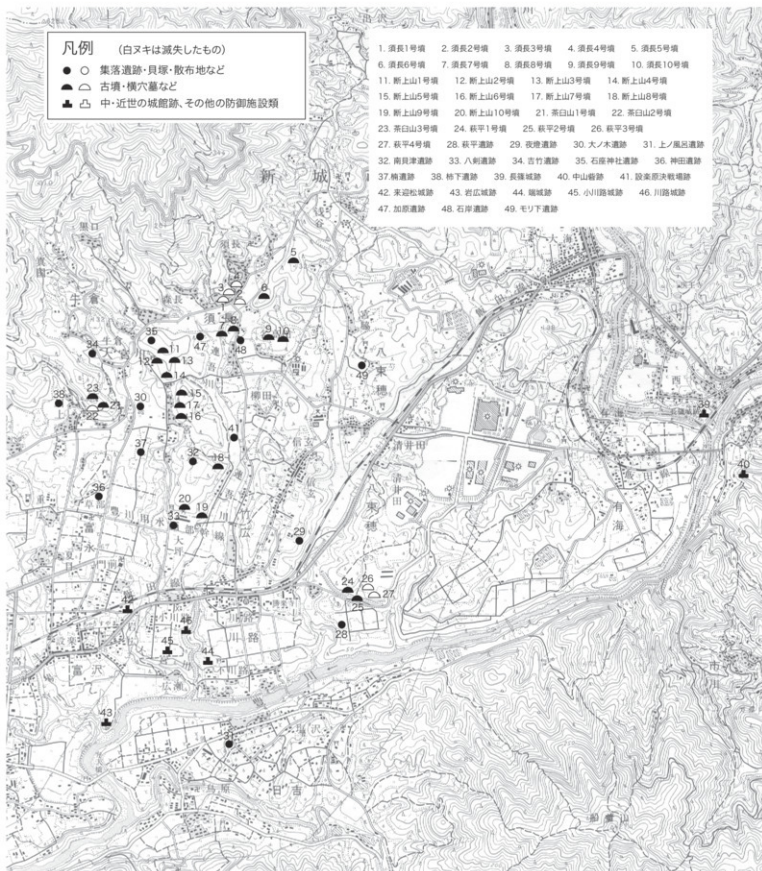
縄文時代では、早期の土器片が上述の萩平遺跡と同様に確認された夜燈遺跡、早期の竪穴や中期の堅穴建物跡、前期、晩期と思われる遺物も確認されている石座神社遺跡、後期と思われる土器片が確認された上ノ風呂遺跡、後期の堅穴建物跡が検出された石岸遺跡、後・晩期の遺構、遺物が発掘調査によって確認された大ノ木遺跡、モリ下遺跡などがあげられる。

弥生時代では、後期から古墳時代前期の遺跡が多い。その中で発掘調査による確認では、八剣遺跡にて堅穴建物跡などの遺構、中期の土器片などが、南貝津遺跡、古竹遺跡、石岸遺跡、石座神社遺跡、モリ下遺跡では後期～古墳時代前期の堅穴建物跡が複数検出された。中でも石座神社遺跡では、大型住居を含む 300 棟以上の堅穴建物跡、大型掘立柱建物も含まれる拠点的な集落が確認されており、この地域の当該期における支配者層との関連が注目される。

古墳時代では、今回の調査地点を含めて後期の小規模な古墳群が多い。断上山 9、10 号墳は発掘調査によって前期と考えられ、10 号墳は前方後方墳と考えられている。その他のものについては詳細が確認された例が少なく、ほとんど後期の円墳と推定されている。これらは、雁峯山麓に展開する須長古墳群、その南東側で南北にのびる豊川上位段丘面上に展開する断上山古墳群、さらにその西側で茶白山山麓に所在する茶白山古墳群、これらの古墳群から約 2 km ほど南東方向に位置し、豊川上位段丘面上に展開する萩平古墳群などである。須長、茶白山、萩平古墳群では横穴式石室の確認されているものもあるが、記録も少なく滅失例も多い。

古代のものでは、石岸遺跡、石座神社遺跡にて 8 世紀代と考えられる堅穴建物、掘立柱建物が検出され、加原遺跡では 10 世紀後半～11 世紀と思われる堅穴建物が確認されている。

中世から戦国時代にかけてのものでは、鎌倉時代の小型建物等が検出された柿下遺跡があげられる。さらに今回の調査地点から東に約 4 km、豊川と宇連川の合流部には、戦国時代に長篠の戦いで武田軍が兵糧攻めにした長篠城跡があり、国指定の史跡として数次にわたる整備事業が続けられている。この戦いで武田軍は多くの砦を配したが、長篠城の南東約 500m に位置する中山砦跡では、堀切、陸橋の可能性が考えられる削り出しが確認され、16 世紀のものと思われる鉄製鎌が出土している。



第3図 周辺遺跡分布図(国土地理院1:25000「三河富岡」「三河大野」)

第3節 調査区



第4図 関連遺跡位置図(柿下遺跡報告書 図4を転載)

須長10号墳の調査区は、高速道路建設の事前調査として工事予定地内に設定された。第二東海自動車道横浜名古屋線は、新城市街地北側の山裾に沿うルートが計画され、この中で遺跡の有無確認、範囲確認のための試掘調査が行われた。この結果が協議され、新城市内では9遺跡の本調査が実施されることとなった。9遺跡の調査は平成20～22年度の三カ年にわたって行われ、須長10号墳の調査は平成21年度に実施された。

調査地点は南に向かって下るゆるやかな斜面で、調査地点を含む周辺の旧態は植林、竹林である。遺構検出面や遺構基底部からの湧水は認められず、調査地点の排水処理は雨水のみで、調査区端でのトレンチを利用した。表土の除去は、機械（バックホウ）と一部を人力による掘削によって行った。排土の処理にはベルトコンベヤーを配し、調査区外の南東部斜面にて埋め戻しまで仮置きした。



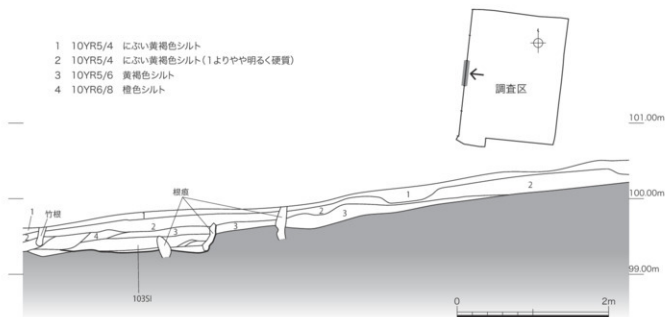
第5図 調査地位置図(新城市都市計画基本図を1:5000に改変)

第III章 遺構

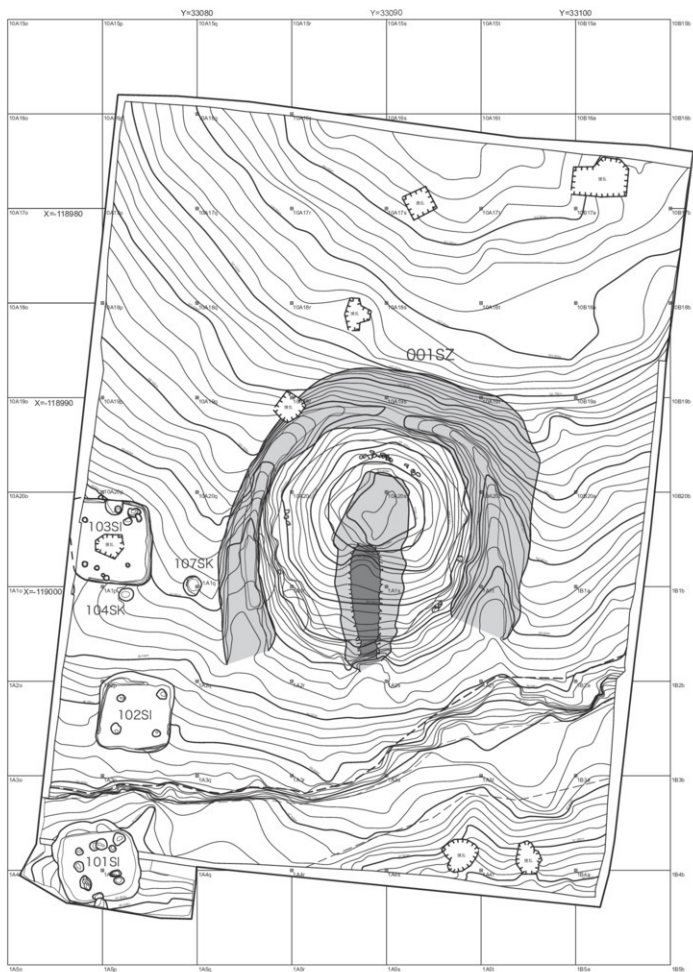
第1節 基本層序

須長10号墳調査地点における基本層序を概観するため、第6図として調査区西壁（部分）の断面を図示した。地表面は標高約97～103mの南向き斜面で、調査区内の平均斜度は約9度であった。調査地の旧態は竹林、植林で、竹林部分は地表面直下に網状の根が広がり、雑木も多かったため埋土中にはこうした樹根が多くめぐり、作業の妨げとなった。表土にはふい黄褐色シルトで、5～10cm程度の厚さで調査区のほぼ全体を覆っていた。古墳の周溝より外側部分では、この表土の直下にて黄褐色シルト、明黄褐色シルトなどの堆積が10～20cmみとめられた。墳丘部分では、表土として褐色シルトがみとめられた。基盤層は、調査区全体に共通して橙色シルトがみとめられた。

調査地点は斜面端部であるため、全体的に土層の自然堆積は薄かった。遺構の検出は、バックホウによる表土除去後、人力にて橙色シルト、明黄褐色シルトを除去した直下にて行い、墳丘および周溝部分は、人力で表土を除去した直下にて行った。黄褐色シルト、明黄褐色シルト中に人為的掘り込みはみとめられず、表土直下から遺構検出面までの間にて検出された遺物は、混入品と思われる山茶碗片などわずかであった。



第6図 調査区西壁部分断面図(1:50)



第8图 調査区遺構平面図(1:200)

第2節 遺構

第1項 概要

今回の調査地点で検出された遺構は、横穴式石室を伴う円墳1、堅穴建物3、土坑5であった。円墳は南向きの斜面に築造されており、石室はほぼ真南に向かって開口する。各堅穴建物跡では、遺構内に柱穴と思われるものも含み複数の土坑が検出された。これらの遺構の中で遺物を伴ったものは、円墳の墳丘、周溝、前提部を含む主体部と各堅穴建物跡のみであり、単独の土坑は遺物を伴っていない。また、遺物包含層と呼べる層は調査区の中ではほとんどみとめられず、遺物の密度もかなり薄かった。

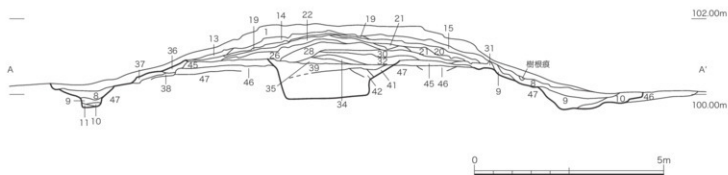
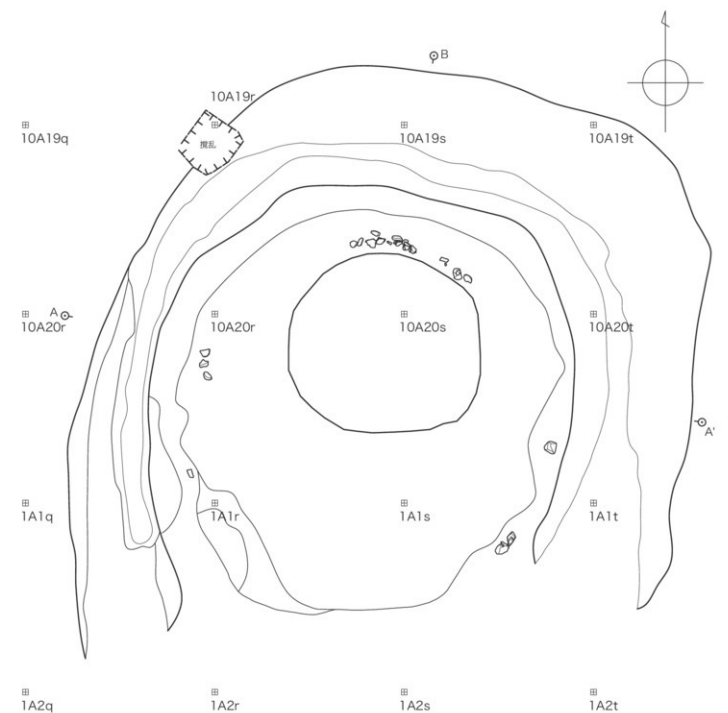
検出された各遺構は、切り合い関係がみとめられないため掘り方による新旧関係は判断できなかった。出土遺物から各遺構の時期を比較すると、時代が大きく分かれることはなく7世紀から8世紀に帰属するものと思われ、古墳の周溝上層からは平安時代中期の遺物も一定量の出土をみた。

第2項 須長10号墳(001SZ)

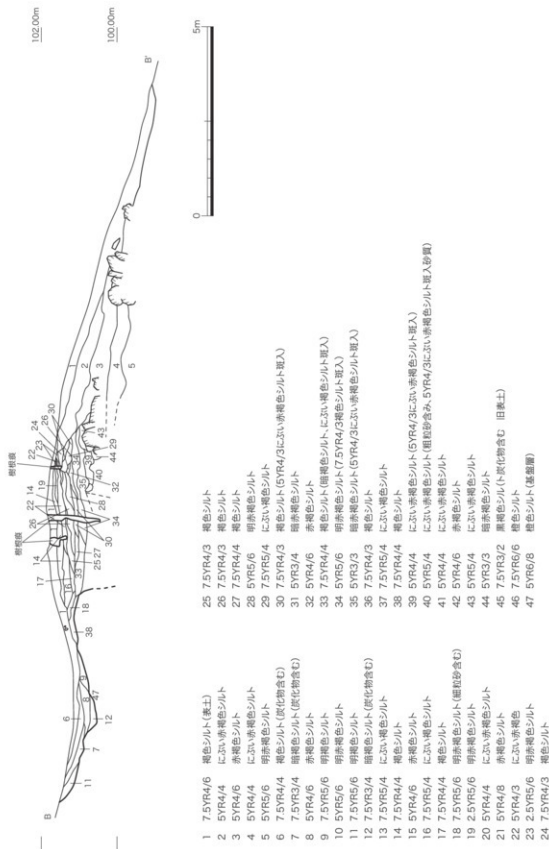
(1) 墳丘

墳丘の堆積土層 範囲確認および本調査着手の時点では、石室の石材および閉塞石と思われるものの露頭はみとめられず、石室自体の存在が確認できていなかった。このため、表土ハギ終了に続いて全体の様相を確認するため、墳丘部を精査して第一次検出作業を行った。この時点では、周溝と思われる浅いくぼみとマウンドの全体的な形状、列石の一部と思われる石がとらえられた。そこでこのマウンド形状に合わせて、任意で墳丘の縦断ラインを南北方向に設けた。そして、この縦断ラインに直行する方向で、東西の横断ラインを設定した。

墳丘の堆積状況は、縦断、横断ラインに沿ってトレンチを掘削し確認した。この作業では表土(1層)の直下から、厚さ10cm前後で薄くしまった土層の重なり(13~34層)が認められた。これらは、一連の作業によって築造された墳丘の盛土と思われる。盛土の前後関係に注意しながら南北断面を観察すると、斜面下部にあたる南側から約10cmの厚さで北側に向かって盛られ、再び南側に戻ってこれを繰り返し積み上げられている状況がみられる。同様に東西断面を観察すると、中央から東側に向かって積み上げた後、反対の西側を積み上げ、その後東西交互に積み上げながら全体を調整して積み上げたと思われる。この盛土の下位では、土坑状の掘り込みが確認された。この土坑状の掘り込みは、墳丘頂部を中心としており、平面形態は南北方向に長径が認められた。掘削は盛土の下から成されているため、盗掘坑とは考えられず、当初は内部主体と捉えて良いのか疑いながら作業を進めた。さらにトレンチ掘削作業を進めると、南北ラインの中心から南裾部において、花崗岩材の積み重ねた状態が一部で検出された。須長10号墳における石室の残存は、この時点において初めて確認された。墳丘の堆積土層の中で斑土が確認できるのは、土坑状の掘り込みの埋土直上(30、33~35、39、40)に集中していた。石室を構築するための墓壇と、その北でこの墓壇に切られる土坑状の掘り込みは、基盤層を掘削して設けられていた。墳丘の中央から南側では、墳丘北側で確認された盛土が切られていた。盛土を切るこの掘り込みには厚さ約40cmの土層(2・3)が重なっており、これらは石室の



第9図 墳丘平面・東西断面図(1:100)



第10図 墳丘南北断面図(1:100)

天井部に達しているため、いずれかの理由で墳丘が削り取られた痕跡と思われる。

須長 10 号墳は円墳であるが、墳丘の全体的な形状は正円ではなく、南北径がわずかに長い楕円形である。周溝底部からみた墳丘東西径は、約 12m を測る。墳丘南北径は、南側前庭部から北側周溝底部間で約 14m を測る。地山平坦面の範囲、墳丘土層から判断すると、墳高は 2.6m 以上であったことが考えられる。

列石 墳丘頂部北側では、長さ約 3.6m にわたり十数点の角礫が列確認された。これらは標高 101.2m 前後を測り、水平を意識し緩い弧を描いて配置されたものと思われる。墳丘の堆積土層の中では、表土直下の 38 層裾部（外側）に位置する。検出時点では、組み合わせで積み上げられたような痕跡は認められず、この列の延長上には連続と判断できるような石は検出されていない。墳丘裾部や周溝の埋土上層からは、転落した可能性が考えられる石が検出された。これらは旧態を保っていた墳丘を巡っていた可能性が考えられるが、列が復元できる状況ではなかった。石の直径は 0.2～0.4m で、いずれも周辺で採取可能な花崗岩であった。

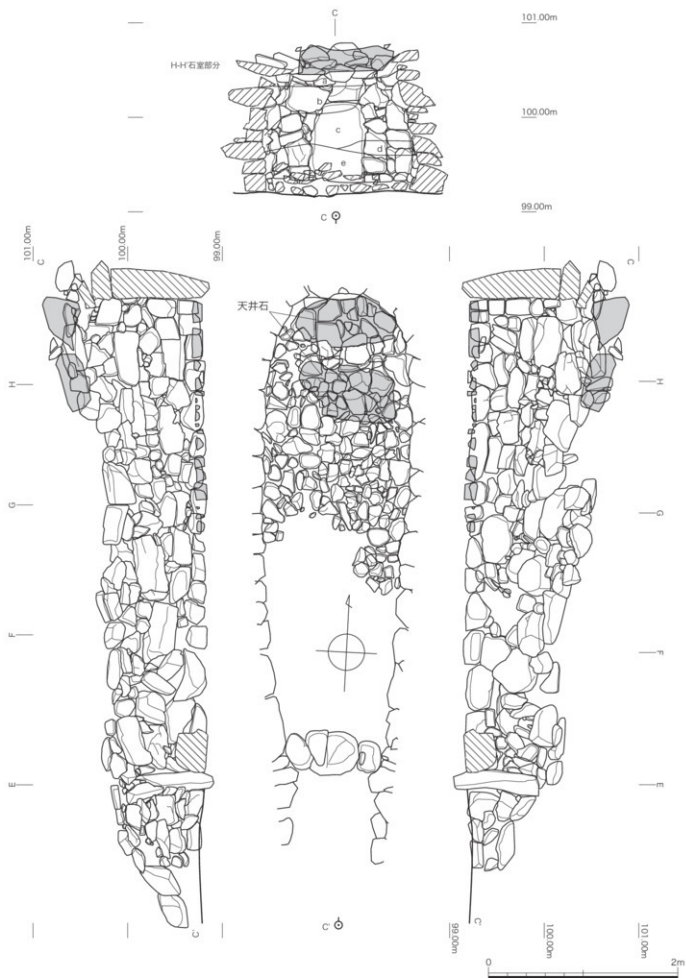
周溝 本古墳は、南向きに下る斜面に位置している。試掘調査、植林伐採後の段階では、明確に「周溝」と捉えられるほどのくぼみは確認できなかったが、表土ハギおよびトレンチ掘削において認知することとなった。周溝と思われる浅いくぼみは、墳丘の正面で斜面下部にあたる南側を除いて、馬蹄形に巡っている。断面形状は、中心の狭く布掘り状に落とされている部分を除き、やや深めの皿状を呈する。調査時点で検出された幅は、全体の中で墳丘の北から東側が比較的広く約 4m、西側ではこれより狭く約 1.5m を測る。中心部分の狭い落ち込みは、0.4～1.0m を測る。深さは、検出された溝外縁と底部間で、0.4～1.0m を測り、基盤層まで掘削されてこの深さが確保されている。この狭い落ち込みは、墳丘の西と東で様相が異なる。墳丘の西側では、南側正面に向かって周溝が途切れる 3m ほど手前にて、途切れる。一方墳丘東側では西側とは異なり、狭い落ち込みは南に向かって徐々に幅を広げて上端と合流し、溝全体が途切れる。

堆積土は、表土を除去した段階で、周溝を認知するに至った赤褐色シルトが検出された。周溝の埋土上層にあたり、この層からは主として平安時代中期の灰軸陶器が出土した。下層では明褐色、暗褐色シルトが堆積しており、遺物はわずかに 8 世紀代と考えられる須恵器が出土した。

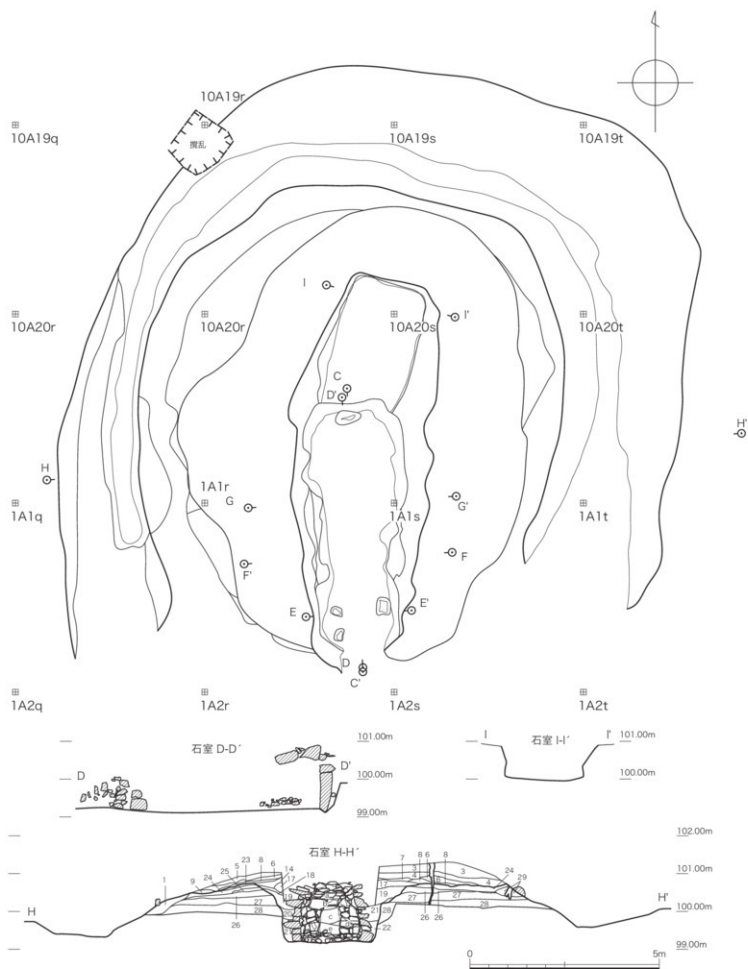
(2) 横穴式石室

須長 10 号墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。土層断面から判断すると、奥壁に近い部分から開口部に向かって墳丘から天井部が削り取られた痕跡が有り、天井部はほとんど残っていない。側壁は削り取られた影響で上部が損壊しているものの、開口部まで比較的良好に残存している。

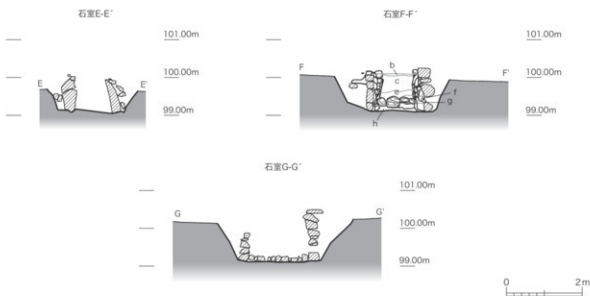
概要 須長 10 号墳の主体部は、S-3°-E に開口する横穴式石室である。石室の構成は単室で、立柱石は壁面よりわずかに内側に突出し、擬似的な両袖を形成している。立柱石の突出は、明瞭とはいえない程度である。立柱石と開口側を結ぶ部分は、検出された壁の終息状況からみて、天井石を明らかに伴っていたかどうか推察が困難である。石室の構成としては、立柱石を伴いつつ羨道の有無、位置が不明瞭なため、擬似両袖式とも無袖類とも断定できない。立柱石間には柵石が据えられているため、羨道部の有無にかかわらずここでは立柱石部を玄門とし、これより奥壁側を玄室として扱った。



第11圖 石室平面・立面展開圖(1:40)



第12图 墓坑平面·断面图(1:100)



第13図 墓横断面図(1:100)

石室の全長は 6.6m を測る。

石室 平面形態は、玄門部から奥壁側に向かって両側の壁が弧状を描いてわずかに外側に広がり、奥壁手前にて幅が窄まる。玄室長は 5.0m、幅は玄門部 0.75m、最大部で 1.6m、奥壁部 1.1m を測る。最大幅の位置は石室中間付近よりかなり奥壁側で、奥壁から玄門部に向かって 1.3m 付近である。玄室内からの出土遺物は、7 世紀後半と比定される須恵器の長頸壺が 1 点のみで、倒れた状態で奥壁が窄まる部分の床面から出土している。

天井石は、奥壁側に 2 石のみが遺存している。2 石のうち奥壁にかかるものは長方形で片側に平坦面をもって、長径 1.1m、短径 0.6m、厚さ 0.4m、下面と敷石上面間の距離は 1.2m を測る。手前のものは長方形で両面に平坦面をもち、長径 1.1m、短径 0.6m、厚さ 0.3m、下面と敷石上面間の距離は 1.1m を測る。

側壁は、長径 0.2～0.6m ほどの石材が使用されており、材質はすべて花崗岩である。ここで扱う側壁の左右は、奥壁側から開口部側を見た左右とする。左右両壁ともに、柱状、板状の石材が多く使われ、端部平坦面を室内に向けて壁面が築かれている。小口積みが圧倒的に多く、その中にいくらか長手積みが混じる。壁として積み重ねた段は、奥壁側では天井石まで 6～7 段が観察できるが、各段は玄門部側まで同じ高さで積み上げられておらず、奥壁側が高く玄門部側に向かってゆるやかに下がっている。断面から観察できる壁の立ち上がりは、玄室最大幅付近で右壁 83°、左壁 84°の内傾を測る。立柱石より開口側に右壁で 1.4m、左壁で 0.8m が遺存していた。

奥壁は、中央に板状の大型石材が 1 石据えられ、この石に向かって左右両壁が窄められながら取り付けられている。大型石材は縦長の扁平なものを立てて使っていて、長径 1.1m、短径 0.7m、厚さ 0.3m、床面からの高さ 1.0m を測る。他の石室の材料と同様に、使用製材は花崗岩であった。この大型石材の上に小型石材が 2 段ほど積み重ねられ、天井石に至っている。

床面は、玄室の奥壁側約半分の範囲に敷石が設けられているが、玄門側には見られない。玄室中央



前庭部遺物出土状況 部分拡大(1:20)



第14図 石室検出平面図(1:50)



第15図 石室天井石・転落石除去平面図(1:50)



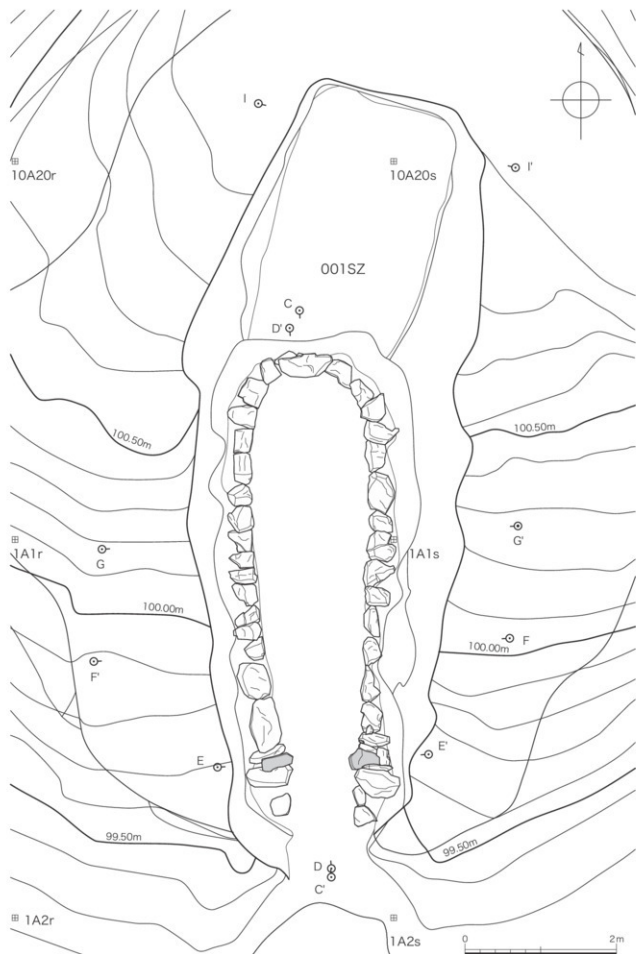
部分拡大(1:10)



第16図 石室閉塞石除去平面図(1:50)



第17図 石室敷石検出平面図(1:50)



第 18 图 石室基底石・墓壙平面图 (1:50)

に位置する敷石の端部は、輪郭が直線的ではなく不整形な縁辺を呈する。長径 0.1~0.4m の板状を呈する石材が多く使われ、平坦面が上に向けられる。並べ方に規則性は見られず、隙間が少なくなるように石材の形を合わせて、重なること無く面を成すように並べられている。奥壁に近い側では広い面の石材が多く使われ、端部側では小型の石材が使われている。使用製材は、すべて花崗岩である。立柱石の玄室側には梱石が据えられ、玄室内外の床面はほぼ同じ高さだが、梱石から開口部側に向かっては、わずかに上る。敷石検出高から 10cm 上の埋土は、遺物の取り上げエラーを防ぐため、梱石から奥壁間の全てを対象として三段階で簡をかけたが、土器碎片 1、長頸壺 1 以外に見出せなかった。

玄門部は、立柱石が一組据えられ、これと内側で接した位置には梱石が渡されている。立柱石には縦長の石材が用いられ、左壁の立柱石は床面からの高さ 0.8m、長さ 0.9m、室内に向けられた面の幅 0.2m、壁側への奥行き 0.4m を測る。右壁の立柱石は床面からの高さ 0.9m、長さ 1.0m、室内に向けられた面の幅 0.15m、壁側への奥行き 0.4m を測る。両立柱石は、似た形、大きさの石材が選ばれて据えられていた。どちらもその上に小型石材が積まれ、直接天井石を支えるに至っていない。梱石は、玄門部間 0.75m の床面を 3 石で渡し、右壁側は小型石材を積んで左壁側との高さ調整が成され、2 段になっている。床面からの高さは 0.35m を測る。

玄門から開口側に向かっては、閉塞石が検出された。閉塞石の多くは、長径 0.2~0.4m の石材で、塊状のものが多く、板状のものは少なかった。閉塞石の先端は、立柱石より奥壁側、梱石の奥壁側端部より 0.1m 手前から置かれていた。この位置より、右壁端部の 0.25m 手前まで、閉塞に使用されたと思われる石が置かれ、この開口側端部から外側の床面に、須恵器坏蓋 7 点、同坏 10 点、同有台坏 1 点、同高杯 10 点、土師器甕 1 点がまとめて出土した。これらの製作年代は、7 世紀後半と考えられる。

石室の基底石は墓坑の底面に配置され、平面形態は縦長の馬蹄形を呈する。右壁に比べて左壁の配置がわずかに直線的だが、立柱石をわずかに突出させた最狭幅から、奥壁に向かってわずかに弧状を描きながら幅を広げる。左右の壁はともに、奥壁の大型石材に接続する手前の 2 石が急激に幅を窄める角度に並べられる。最大幅を奥壁側に有しながら、ゆるい胴張形から奥室まりの要素を加味して配されたものと思われる。

石室奥壁、側壁の後背では、奥壁と立柱石付近にてわずかに小型の石が含まれているのを確認したが、これら以外に壁の後背では検出されず、石材による明確な裏込めは確認できなかった。

墓道は明確に検出されなかったが、玄門から石室外に向かって徐々に幅を広げ、側壁端部からは外側に向かって「ハ」の字状に広がった痕跡が認められた。

墓壇ほか 本古墳の横穴式石室は、基盤層を掘削した墓壇の中で石材を組み、石室を築いている。平面形態はやや胴が張った長方形で、奥壁側、前庭部側ともに端部は窄まっている。長軸にあたる南北径は上端にて 7.0m、幅は胴の張った最大部で約 3.6m、旧表土からの掘削深度は、奥壁側で 1.4m を測る。低部平坦面は長さ 6.4m、幅 2.2m で、上端同様に下端においても奥壁側、前庭部側ともに端部は窄められている。こうした平面形態は、石室を構築する過程においてその構造、形態を想定した上で、掘削行為に及んだことが考えられる。断面形態は逆台形を呈し、側壁からの立ち上がり角度は 50~70°で、奥壁では 60°を測る。

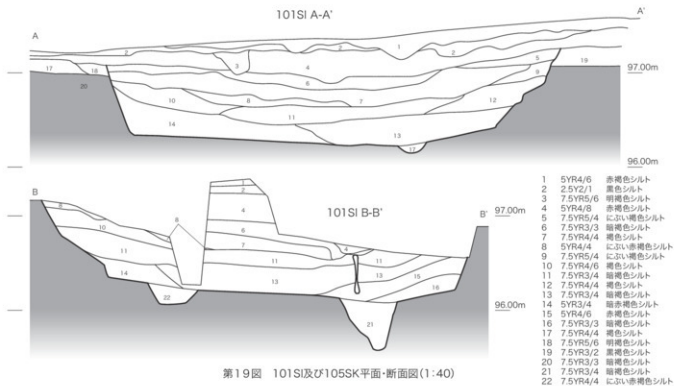
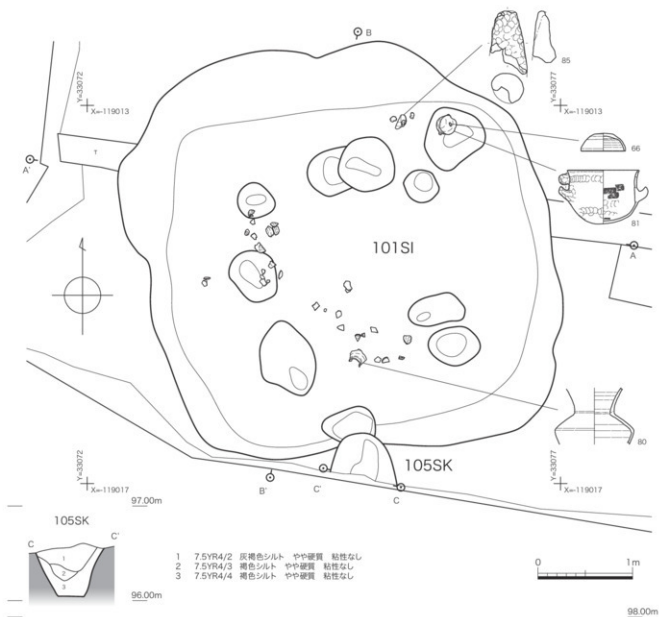
須長 10 号墳の墓壇は、北端の奥壁側にて土坑状の掘り込みを切って掘削されている。墓壇に切られている土坑状の掘り込みは、石室の掘形とは主軸の方向が異なり、ほぼ南北方向 S-3°-E の石室主軸に対し S-16°-W とやや西側に偏向し、上端での長軸は推定 4.6m、最大幅 3.4m、下端での幅 2.0m、旧表土面からの深さは 1.1m を測る。断面形態は逆台形状を呈し、低部は平坦面を意識した掘削が成されている。埋土は、暗赤褐色、にぶい赤褐色等を基調とする斑土が堆積していた。石材などによる内部構造は認められず、盛土の下位で石室の掘形を掘削する前に掘削されているため、盗掘坑や石室の突出部にはあたらない。遺物も出土していないため、掘削時期や古墳との関連を推測する材料は得られず、墓壇との新旧関係が判断できただけであった。

第 3 項 竪穴建物・土坑

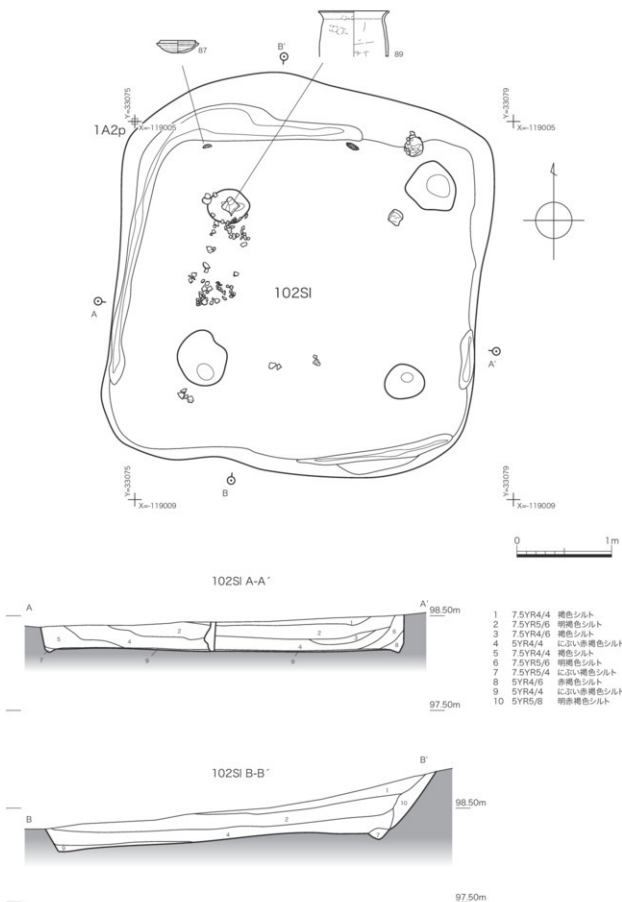
101SI 調査区南西側に位置する。調査区南西側では、竪穴建物跡が南北に並んで 3 棟検出されたが、その中では南側にあたる。平面形態は隅丸方形を呈するが、床面に比べ検出面の輪郭では不規則な湾曲が見られた。検出高は 96.6~97.1m を測り、下端における東西径 3.8m、南北径 3.6m、残存の深さは中央部で 0.9m を測る。埋土は褐色シルト、暗褐色シルトを基調とする。重複関係では、105SK に切られている。平面形に置ける主軸の方向は、南北軸において N-8.5°-W を示す。並んで検出された 102SI、103SI と違って、明確な壁溝は認められなかった。主柱穴の構成は、下端の四隅から床面中央に向かって 0.7~1.2m の位置に 4 基を見出すことができる。床面からの深さは、0.2~0.5m を測る。北壁直下の床面東側からは、土製の支脚、7 世紀後半と思われる把手付きの土師器甕が出土している。構造としての明確なカマドは見出せなかったが、遺物の器種構成と出土位置、上端の湾曲などから、この位置に火処があった可能性が指摘できる。把手付きの土師器甕の中からは、7 世紀前半と思われる須恵器杯蓋も出土しているが、埋土上層からは 7 世紀後半~8 世紀にかけての須恵器杯蓋、有台杯、壺、碗、土師器把手などが出土している。

102SI 調査区南西側に位置する。南北に並んで 3 棟検出された竪穴建物跡の中では、中央に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、検出高は 98.2~98.9m を測り、下端における東西径 3.7m、南北径 3.6m、残存の深さは中央部で 0.75m を測る。埋土はにぶい赤褐色シルト、明褐色シルトを基調とする。平面形に置ける主軸の方向は、南北軸において N-4.5°-E を示す。床面の北西と南東に、浅い壁溝が検出された。主柱穴の構成は、床面の四隅よりやや中央寄りにて 4 基が確認された。床面からの深さは、0.2~0.4m を測る。土師器の甕、把手や須恵器杯身が出土している。出土炭化材の樹種同定ではコナラ、放射性炭素年代測定では 6 世紀中葉~7 世紀前葉の分析結果が得られている。

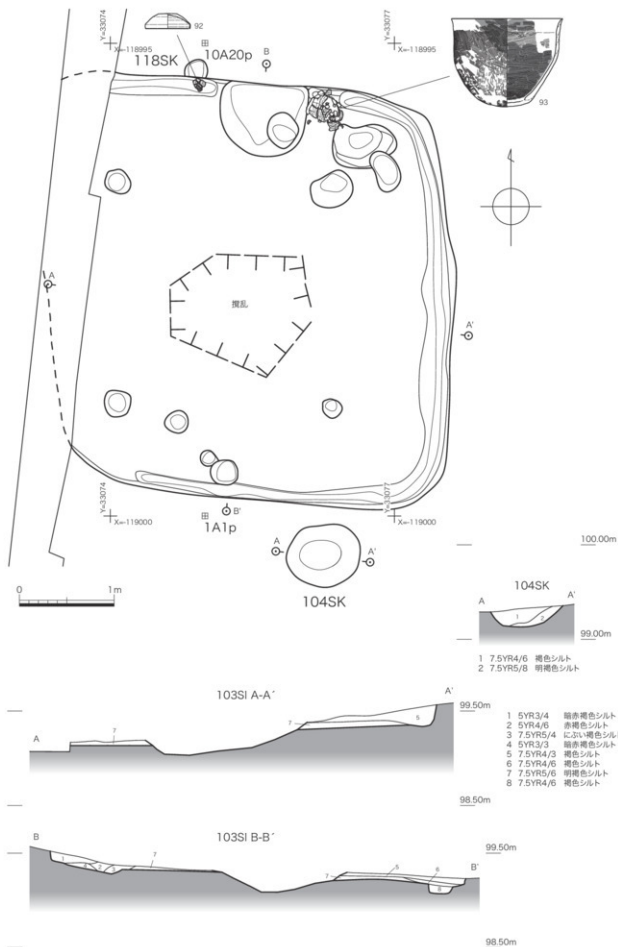
103SI 調査区南西側に位置する。南北に並んで 3 棟検出された竪穴建物跡の中では、北側に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、検出高は 99.0~99.6m を測り、下端における東西径 4.3m、南北径 4.2m、残存の深さは中央部で 0.2m を測る。埋土は褐色シルト、明褐色シルトを基調とする。平面形に置ける主軸の方向は、南北軸において N-2°-W を示すが、東西軸は W-5°-N を示し、北西隅と南東隅がやや鋭角、北東隅と南西隅がやや鈍角である。床面の北辺、東辺、南辺に、壁溝が検出された。床面の四隅よりやや中央寄りにて主柱穴と思われる 4 基が検出されたが、その他にも小穴が複数確認された。床面からの深さは、0.15~0.3m を測る。土師器の甕や 7 世紀中葉と考えられる須



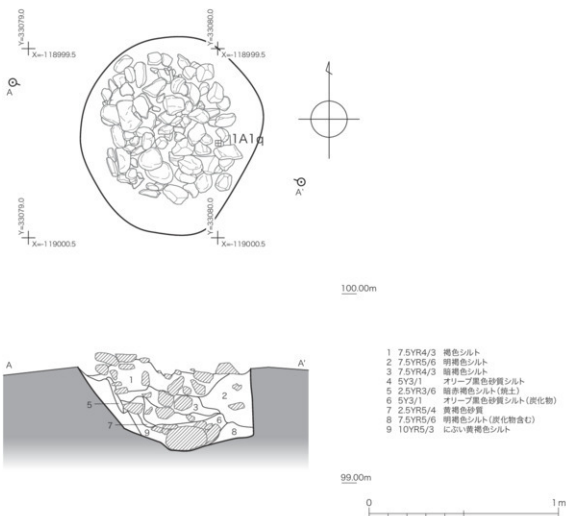
第19図 101SI及び105SK平面・断面図(1:40)



第20図 102SI平面・断面図(1:40)



第21図 103SI 及び 104SK 平面・断面図(1:40)



第22図 107SK 平面・断面図(1:20)

恵器環蓋が出土している。検出された炭化材の樹種同定ではサカキ、放射性炭素年代測定では6世紀後葉～7世紀中葉の分析結果が得られている。

104SK 調査区南西側に位置し、平面形態は不整形を呈し、検出高は99.4mを測り、長径0.8m、短径0.65m、残存の深さは中央部で0.2mを測る。埋土は褐色シルト、明褐色シルトを基調とする。

105SK 調査区南西端に位置する。検出されたのは調査区南端より北側部分で、さらに南側にのびる。竪穴建物101SIの南辺を切っている。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、検出高は99.4mを測り、検出部分の南北径0.5m、東西径0.7m、残存の深さは0.5mを測る。埋土は灰褐色シルト、褐色シルトを基調とする。

107SK 調査区南西側、竪穴建物103SIの南東隅からやや東側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は99.6mを測り、長径1.05m、短径0.9m、残存の深さは中央部で0.45mを測る。埋土は明褐色シルトを基調とするが、径0.2m以下の円礫、角礫を多く含み、これらは被熱の痕跡が観察できた。分層された中には、焼土(5)、炭化物(6)(8)の混入も見られ、炭化材の樹種同定ではコナラ、放射性炭素年代測定では縄文時代早期前葉の分析結果が得られ、集石のある焼土坑が想定される。

第IV章 遺物

第1節 概要

今回の調査で出土した遺物は、前述したようになりに少ないものであった。原因としては、遺構の項でも述べたが、いわゆる遺物包含層と呼べるものは調査区の中ではほとんど認められず、調査区全体が斜面に位置し、特定の遺構内を除くと密度もかなり薄かったことによる。総調査面積は1200m²で、遺物出土量はコンテナ約15箱である。出土遺物の時期的な内訳は、7世紀代以降の須恵器、土師器が最も多く、少ないながら平安時代の灰釉陶器が出土しており、わずかではあるが中世陶器も確認された。

本調査地点では、全体が斜面であり土層の堆積が薄かったため、土層を時期別に把握しながら検出することはできなかった。したがって、遺構の時期は検出面別、層序によって判断が下せず、出土遺物による判断となった。しかしながら、出土遺物の絶対量が少なかったため、一括出土資料による時期の把握は、限定された遺構のみで可能であった。

7世紀代以降の遺物は、須恵器、土師器が出土していて、遺構外にて検出された遺物は極端に少なく、特定の遺構に伴って出土している。

平安時代の遺物は、灰釉陶器他が少ないながら出土しているが、遺構から出土しているものであっても埋土上層からであり、出土状況は遺構に対して二次的である。

中世の遺物は陶器片がわずかに認められたが、他の時期と比べると絶対量が極端に少なく、遺構の時期を決定するような出土状況は見られなかった。

ここでは、時期の把握がある程度可能な遺物について、時期別に説明する。なお、遺物が比較的多く出土した遺構については、優先的にそれぞれの遺構ごとに説明する。さらに個別の遺構外出土遺物についても、選択的に説明する。

第2節 主要遺構別出土遺物

O01SZ 石室 1は須恵器の長頸壺である。石室内からの出土遺物は、遺構の項でも述べたようにこの長頸壺1点のみである。出土地点は、右壁が奥壁の大型石材に向かって急激に窄まる角の床面からで、前底部出土遺物とともにこの古墳の時期的な判断を下す対象となっている。体部下半はへう削りが施され、高台付で、断面形態では頸部から口縁部にかけては外反が少なく、縁台のあるものと違い口縁部を引き上げた成形で直線的に開くが、肩部は丸みを帯びて張らない。こうした形態的特徴から、在地産（ここでは近在の生産地である湖西、豊橋等を含む）で猿投窯編年1-17期に併行する時期（以下猿投窯編年は「城ヶ谷2010」による）の製品と想定する。

O01SZ 前底部 2～30は石室前底部からの出土遺物である。今回の調査区の中では、遺物がまと

まって出土した数少ない地点である。2～8は須恵器の坏蓋で、その特徴からいずれも在地産と想定する。淡灰色を呈し、回転へう削りにより整形されているが、4では明確に認められない。天井部から体部にかけてゆるやかに丸みをもつものが多く、口縁端部は丸みを帯びる。8は、天井部と体部の境界に沈線が認められる。他の蓋と比べてやや大きいため、時期的には先行形態かもしれない。9～19は須恵器の坏で、15は有台である。いずれも在地産と想定され、色調は淡灰色である。口縁端部は、全体的に立ち上がりが短く内傾が強い。中でも、9は短さが目立ち、19は他の坏身と比べて立ち気味な特徴が観察できる。16は口縁端部が外反し、18は口縁端部が薄くやや湾曲しており、他の坏身よりやや大きいため、時期的には先行形態とも考えられる。10には外側体部にへう記号が施されている。12に見られる底部の調整は、回転に依らないへう削り整形である。20～29は須恵器の高杯である。このうち21、22、24、28は在地産と思われ、色調は淡灰色を呈する。脚部はハの字形に広がり、端部は面をもつ。21、28には、坏部の体部外面に1条の沈線が認められ、28には脚部にも浅い沈線が2条認められる。21、22、24は坏部の立ち上がりが浅く開き、口径が14～17cmと大きく、22、24は口縁端部が外反する。20、23、25～27、29は猿投窯系と思われ、色調は褐灰色を呈する。短脚で、器高はいずれも低く約7cmを測り、器壁は厚めで、27のように成形にゆがみがあり、つくりが粗いものも見られる。坏部の見込み部分には、共通の特徴としていずれもへう記号が認められ、体部外面には1条の沈線が認められる。30は土器甕で、口縁端部は肥厚し面とりが成されていることから、三河型の特徴がみとめられる。前庭部からまをもって出土した須恵器については、猿投窯編年のI-17期、併行期に比定されるが、甕の形態的特徴から想定される時期はこれらよりかなり新しく、時期的にこれらは整合しない。

001SZ周溝下層 須長10号墳では、周溝の上層からは一定量の遺物が出土しているが、下層からはほとんど遺物が出土していない。31、32は須恵器の蓋で、摘みが付き、色調は淡灰色を呈する。形態的特徴から想定される時期は、石室内、前庭部から検出された須恵器よりも新しい。

001SZ周溝上層 33～65は、須長10号墳の周溝上層から検出された遺物である。石室、前庭部から出土した遺物と比べ、時期に幅が認められる。33～40、61は須恵器で、33～35は坏蓋、36、37、61は有台坏である。38、39は壺、40は長頸壺である。いずれも色調は淡灰色を呈し、在地産と想定する。41は土器の碗で、底部には回転糸切り痕がみられ、器壁は薄く口縁端部は外反する。形態的特徴には須恵器坏身と共通点が多く、模倣してつくられたものと思われる。これらは、石室、前庭部から出土した須恵器より、時期的に新しいと思われる。42～60、62から65は、灰釉、灰釉系陶器碗である。42、43、45、47、50～53、56、58～60、62～64は、その特徴からいずれも在地産（ここでは近在の生産地である二川、瀬美等を含む）と想定する。47、62などのように高台はやや高いものが混じるが、63、64など雑なつくりも見られる。58には見込み部分に黒書が認められる。44、46、48、49、54、55、57、65は、猿投窯系と想定する。在地産、猿投窯系ともに、形態的特徴から猿投窯編年のO-53期、H-72期とその併行期にあたるものと思われる。

101SI 66～86は、堅穴建物101SIから出土した遺物である。3棟検出された堅穴建物跡の中では、最も多くの遺物を出土しているが、床面近くから出土したものはわずかであった。66～80は須恵器である。66、67は坏蓋で、66は建物内北西隅の土坑から81の甕とともに出土した。在地産と思わ

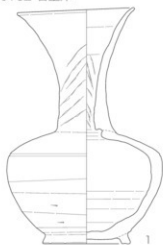
れる砂っぽい胎土で、天井部から体部にかけてゆるやかに丸みをもち、口縁端部は丸みを帯びる。猿投窯編年の H-50 併行期に相当するものと思われる。67 には、天井部から体部の境界に沈線が 1 条めぐり、天井部は回転ヘラ削り整形で、体部はナデ調整が施されている。色調は褐灰色を呈し、猿投窯編年の I-17 期に相当するものと思われる。69～72、74～76 は有台坏である。色調は、いずれも淡灰色を呈し在地産の須恵器と思われるが、72 は赤みを帯びた発色が見られ猿投窯系と想定される。70 は外側の腰部に段状の稜がめぐり、74 は摩耗が激しい、といった特徴が認められた。形態的特徴から猿投窯編年の I-41 期、併行期に相当するものと思われる。77 は床面に近い位置から出土した高杯で、口縁端部は外反し、体部には沈線が 2 条めぐり、坏部は半球形を呈して深く、透かしのない脚部は坏部の大きさに呼応するほど長くない。脚部の端部は、面がとられている。色調は淡灰色を呈し、在地産の須恵器と思われる。形態的特徴から、猿投窯編年の H-50 併行期に相当するものと思われる。78～80 は壺である。81～85 は土器で、81 の把手付き甕、82 の把手、85 の支脚は床面からの出土である。81 の甕は丸底、短胴で、口縁部から体部にかけてややくびれが認められる。把手は、装着部分内側にあたる体部内面に凹みが認められ、差し込み式で装着されたものと思われる。83 の把手には一部にハケ目が認められ、ハケ調整の甕に伴うものと思われる。86 は楕円、扁平な円蹄で、上下両端にはつぶれが認められ、礫石器の可能性が考えられる。

102SI 87～91 は、堅穴建物 102SI から出土した遺物である。3 棟検出された堅穴建物は、床面積の規模に極端な差はないものの、出土遺物の量では 101SI に比べてかなり少ない。87 は須恵器の坏身で、色調は褐灰色を呈し、ヘラ削りは処理に粗さが認められる。底部は丸みを帯び、立ち上がりは内傾し、口縁端部は外反する。内側にはナデ調整が施されており、猿投窯系と想定され、形態的特徴から猿投窯編年の I-17 期に相当するものと思われる。88～91 は土器である。88 は小型、89 は長胴の甕である。89 は、口縁端部の張り出しが短く、口縁部はナデ調整が施され、外側は未調整である。90、91 は把手で、装着面側中央にはいずれも突起が認められる。88 を除いて、床面または下層から出土している。

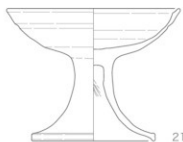
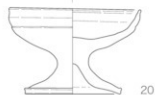
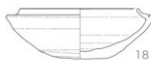
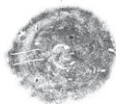
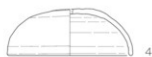
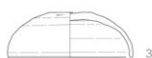
103SI 92、93 は、堅穴建物 103SI から出土した遺物である。後世に床面近くまで削平されており、検出された 3 棟の堅穴建物では出土遺物が最も少ない。92 は須恵器の坏蓋で、ヘラ削り整形された天井部にはヘラ記号が認められる。体部は直線的で、器壁は薄い。色調は灰色を呈し、在地産と想定され、形態的特徴から、猿投窯編年の H-50 併行期に相当するものと思われる。93 は土器の甕である。ハケ目が残っており、底部には段が認められ、接合痕が明瞭に認められる。口縁端部はナデ調整が施され、体部は上方が張る。断面形態では、外側のくびれは認められないが口縁端部内側は外反する。どちらも床面から出土している。

トレンチ・検出など 94～103 は、トレンチ掘削、検出作業中の出土遺物である。遺構の項でも述べたように、今回の調査区では基盤層までに堆積する土層では、時期を特定できるような遺物包含層は認められなかった。出土量もわずかで、出土遺物から想定できる内容はわずかである。94、95 は須恵器である。94 は坏身、95 は有台坏で、色調は淡灰色を呈し、在地産と想定される。97～101 は灰軸、灰軸系陶器の碗である。97、100 は灰軸のツケ掛けが認められ、渥美産の可能性が考えられる。102、103 は土器の把手で、102 には装着面側中央に突起が認められる。

001SZ 石室床



001SZ 前庭部

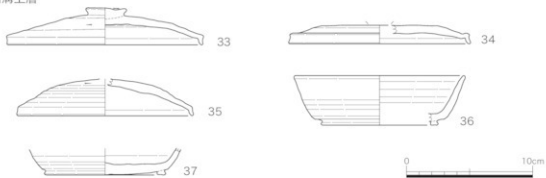


第23図 出土遺物実測図(1)

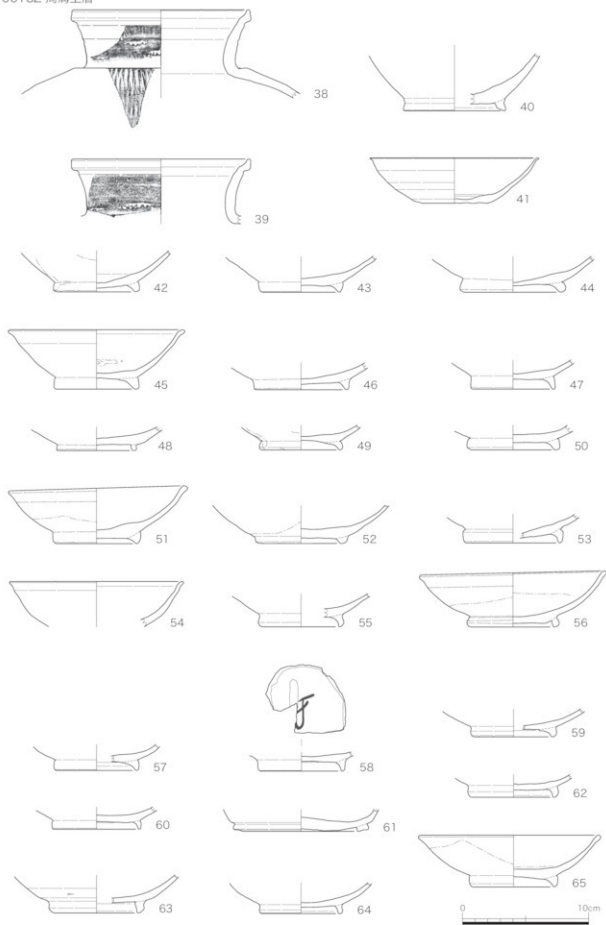
001SZ 前底部



001SZ 周溝上層

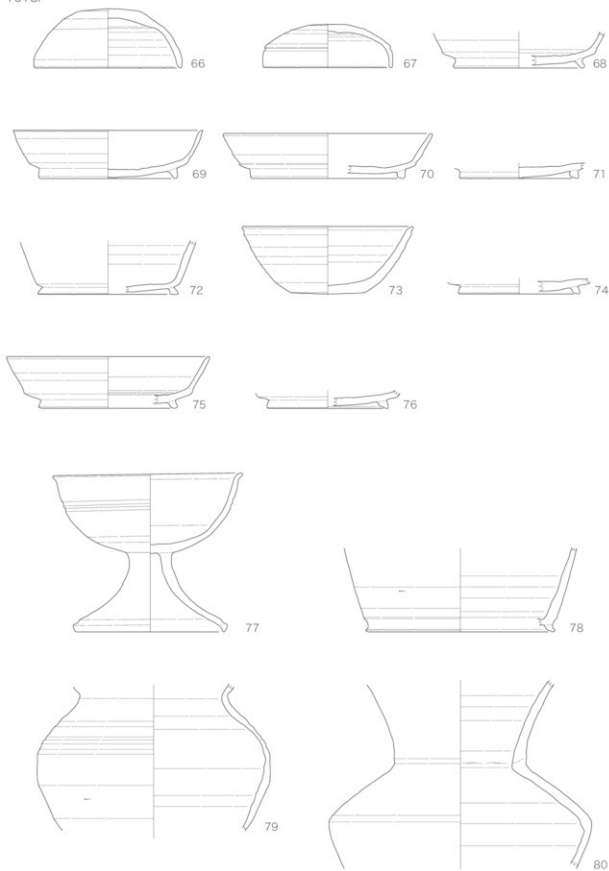


第24図 出土遺物実測図(2)



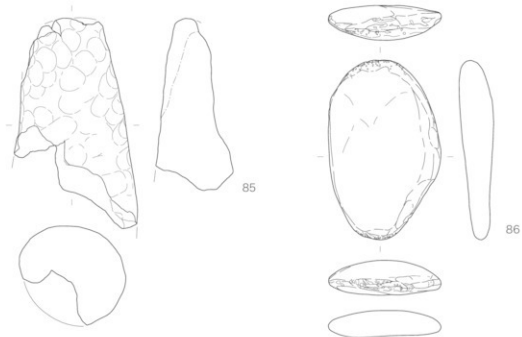
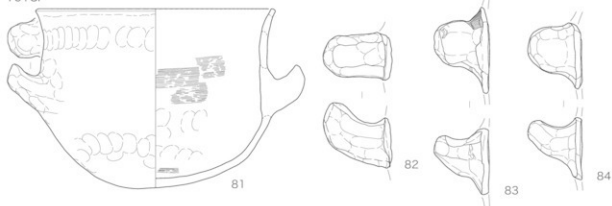
第25図 出土遺物実測図(3)

101Si

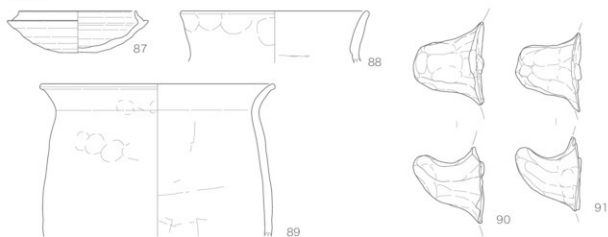


第26図 出土遺物実測図(4)

101SI



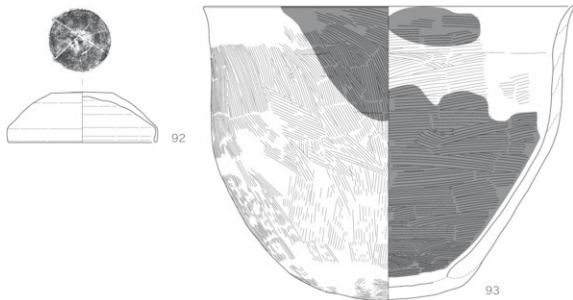
102SI



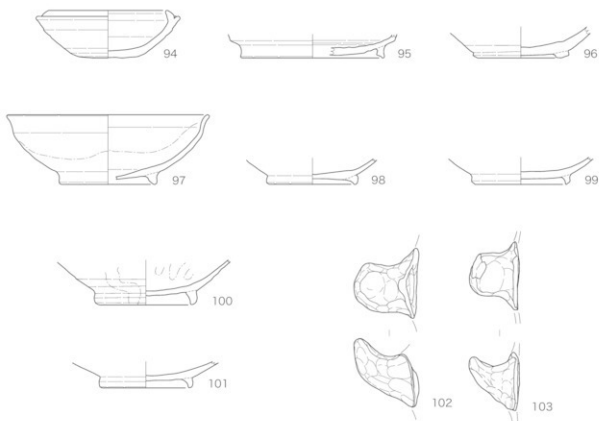
0 10cm

第27図 出土遺物実測図(5)

103Si



トレンチ・検出など



0 10cm

第28図 出土遺物実測図(6)

第Ⅴ章 自然科学的分析

第1節 炭化材の樹種同定

黒沼保子（バレオ・ラボ）

1. はじめに

須長10号墳は新城市須長に所在する、直径約10mの円墳と考えられており、墳丘の西側平坦面に位置する竪穴建物跡からは、7世紀代のものと思われる須恵器高坏が出土している。須長10号墳から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料はすべて炭化材である。001SZ 石室内から1点（試料 No.1）、107SK から2点（試料 No.2、4）、103SI から1点（試料 No.3）、102SI から1点（試料 No.5）の計5点である。

放射性炭素年代測定の結果、001SZ 石室内から出土した炭化材は飛鳥時代～奈良時代、103SI と102SI から出土した炭化材は古墳時代後期の値を示した。また、107SK から出土した炭化材2点は縄文時代早期前葉の値を示した（放射性炭素年代測定の項参照）。

各炭化材について、手あるいはカッターナイフを用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、同定用の試料を作製した。これらを直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して、走査型電子顕微鏡（日本電子製 JSM-5900LV 型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

広葉樹のシイノキ属、コナラ属コナラ節、サカキの3分類群が確認された。001SZ 石室内から出土した炭化材はシイノキ属（試料 No.1）、107SK から出土した炭化材2点（No.2、4）と、102SI の1点（No.5）はコナラ属コナラ節、103SI から出土した炭化材1点（試料 No.3）はサカキであった。形状はいずれも破片となっており、元の形状は不明である。なお、全ての試料について同一試料内に複数破片が存在したが、すべて同じ樹種であった。結果の一覧を表1に示す。

表1 樹種同定結果

試料No.	取り上げNo.	遺構番号	グリッド	樹種	形状（残存径、残存年輪数）	年代測定番号
1	43	001SZ石室内	1A1r/5w	シイノキ属	破片（2.0×1.5cm、2年輪）	PLD-20755
2	48	107SK	10A20p	コナラ属コナラ節	破片（1.5×0.8cm、6年輪）	PLD-20756
3	52	103SI	10A20o	サカキ	破片（1.3×0.8cm、7年輪）	PLD-20757
4	54	107SK	10A20q	コナラ属コナラ節	破片（1.0×1.5cm、8年輪）	PLD-20758
5	99	102SI	1A2p	コナラ属コナラ節	破片（0.3×1.5cm、12年輪）	PLD-20759

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版 1 1a-1c(試料 No.1)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きい接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一となる。放射組織は同性で単列である。

シイノキ属は暖帯に分布する常緑高木で、スダジイとツブラジイがある。ツブラジイには集合放射組織があり、スダジイにはみられない。今回の試料は小片で集合放射組織の有無が確認できなかったため、シイノキ属とした。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 1 2a-2c(No.2)、3a-3c(No.4)、4a-4c(No.5)

大型の道管が年輪のはじめに 1 列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の 2 種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は、全体的に重硬で加工困難である。

(3) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版 1 5a-5c(No.3)

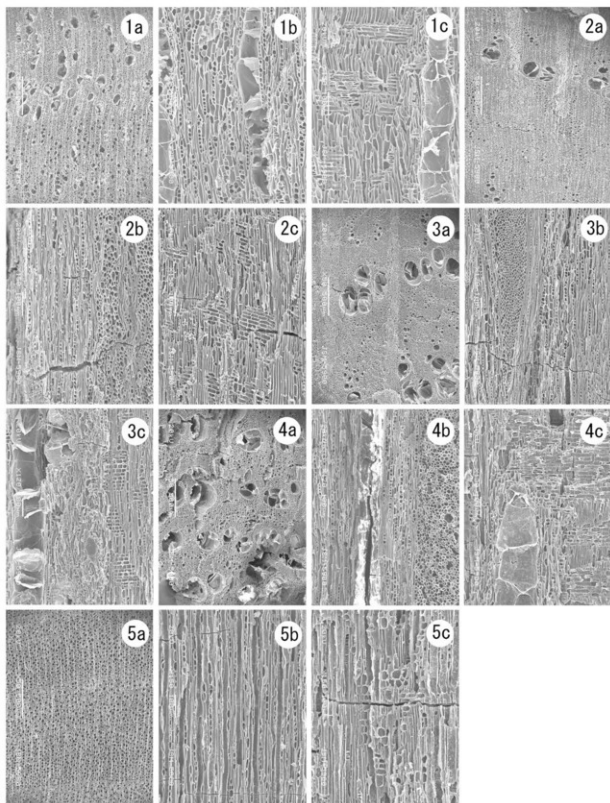
小径の道管がほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は 30 段程度の階段状である。道管壁にはらせん肥厚。放射組織は異性でほぼ 1 列である。

サカキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靱、割裂は困難である。

4. まとめ

107SK から出土した炭化材 2 点はいずれもコナラ属コナラ節で、放射性炭素年代測定により縄文時代早期前葉の年代が得られている。001SZ 石室内から出土した炭化材はシイノキ属で、年代測定により飛鳥時代～奈良時代の年代が得られている。102SI と 103SI の炭化材は放射性炭素年代測定により古墳時代後期の年代が得られており、樹種は 102SI がコナラ属コナラ節、103SI がサカキであった。

シイノキ属とサカキは常緑の広葉樹で、温帯から暖帯における常緑樹林帯の主要構成樹木である。コナラ属コナラ節は落葉の広葉樹で、日当たりの良い環境に生育する陽樹である。いずれも高木になり、材質は重硬である。試料はいずれも破片状になっていて元の形状が不明なため、用途はわからない。しかし、102SI と 103SI は住居跡であるため、建築材や燃料材であった可能性が考えられる。



第29図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. シイノキ属 (試料No. 1)、2a-2c. コナラ属コナラ節 (試料No. 2)、3a-3c. コナラ属コナラ節 (試料No. 4)、4a-4c. コナラ属コナラ節 (試料No. 5)、5a-5c. サカキ (試料No. 3)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

1. はじめに

愛知県新城市に位置する須長 10 号墳より検出された炭化材について、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 2 のとおりである。

試料は、001SZ 石室内から出土した炭化材 1 点 (PLD-20755)、107SK から出土した炭化材 2 点 (PLD-20756、20758)、103SI から出土した炭化材 1 点 (PLD-20757)、102SI から出土した炭化材 1 点 (PLD-20759)、計 5 点である。試料 No.3 (PLD-20757) は最終形成年輪が残存していたが、それ以外の試料は破片で、最終形成年輪は残存しておらず、部位不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表2 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-20755	遺構: 001SZ石室内 グリッド: 1A1r/5W 試料No. 1 遺物No. 43	試料の種類: 炭化材(シイノキ属) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20756	遺構: 107SK グリッド: 10A20p 試料No. 2 遺物No. 48	試料の種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20757	遺構: 103SI グリッド: 10A20o 試料No. 3 遺物No. 52	試料の種類: 炭化材(サカキ) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20758	遺構: 107SK グリッド: 10A20q 試料No. 4 遺物No. 54	試料の種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20759	遺構: 102SI グリッド: 1A2p 試料No. 5 遺物No. 99	試料の種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

3. 結果

表3に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表3 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-20755 試料No. 1 遺物No. 43	-26.83 \pm 0.22	1297 \pm 19	1295 \pm 20	671AD (44.5%) 709AD 747AD (23.7%) 766AD	665AD (61.6%) 724AD 739AD (33.8%) 771AD
PLD-20756 試料No. 2 遺物No. 48	-26.47 \pm 0.19	9418 \pm 31	9420 \pm 30	8745BC (36.8%) 8697BC 8681BC (31.4%) 8640BC	8780BC (95.4%) 8624BC
PLD-20757 試料No. 3 遺物No. 52	-31.32 \pm 0.16	1436 \pm 20	1435 \pm 20	609AD (68.2%) 643AD	586AD (95.4%) 652AD
PLD-20758 試料No. 4 遺物No. 54	-28.70 \pm 0.17	9433 \pm 31	9435 \pm 30	8760BC (47.3%) 8701BC 8676BC (20.9%) 8646BC	8792BC (95.4%) 8632BC
PLD-20759 試料No. 5 遺物No. 99	-26.34 \pm 0.16	1490 \pm 19	1490 \pm 20	561AD (68.2%) 600AD	542AD (95.4%) 619AD

4. 考察

各試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。以下、各試料の暦年較正結果のうち2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、遺構ごとに結果を整理する。

001SZ石室内から出土した炭化材(試料No.1:PLD-20755)は、665-724 cal AD(61.6%)および739-771 cal AD(33.8%)であった。これは、7世紀後半～8世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代に相当する。

107SKから出土した炭化材(試料No.2:PLD-20756)は、8780-8624 cal BC(95.4%)であった。また、同じく107SKから出土した炭化材(試料No.4:PLD-20758)は、8792-8632 cal BC(95.4%)であった。小林(2008)による縄文土器編年と暦年代の対応関係によれば、いずれも縄文時代早期前葉に相当する。

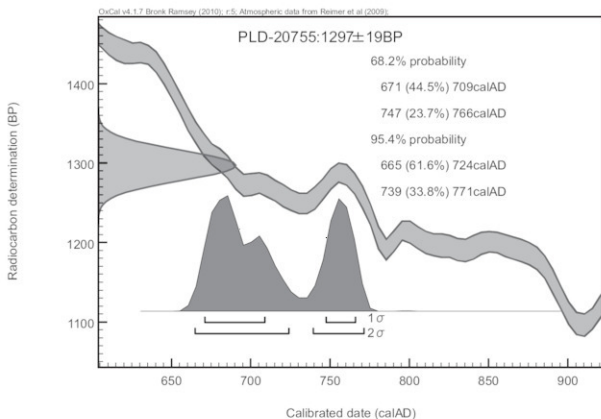
103SIから出土した炭化材(試料No.3:PLD-20757)は、586-652 cal AD(95.4%)であった。これは、6世紀後半～7世紀中頃で、古墳時代後期に相当する。

102SIから出土した炭化材(試料No.5:PLD-20759)は、542-619 cal AD(95.4%)であった。これは、6世紀中頃～7世紀前半で、古墳時代後期に相当する。

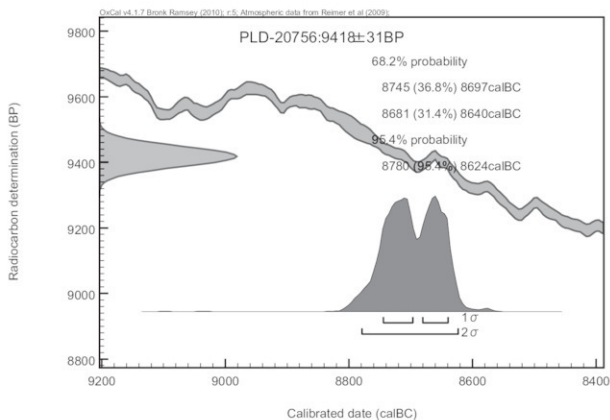
ただし木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料では、試料No.3(PLD-20757)以外の試料が最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受けている可能性、すなわち木材が枯死・伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

参考文献

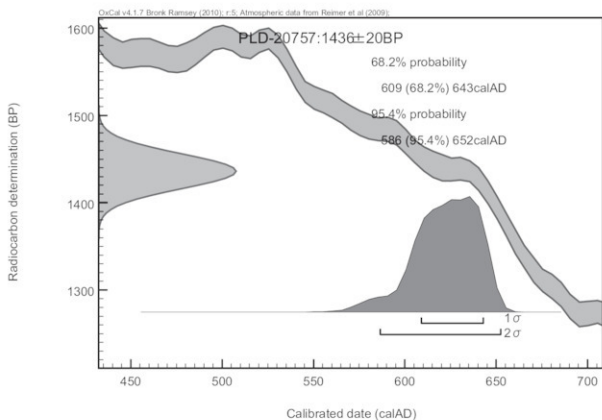
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 小林謙一(2008) 縄文時代の暦年代, 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」:257-269, 同成社.
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」:3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.



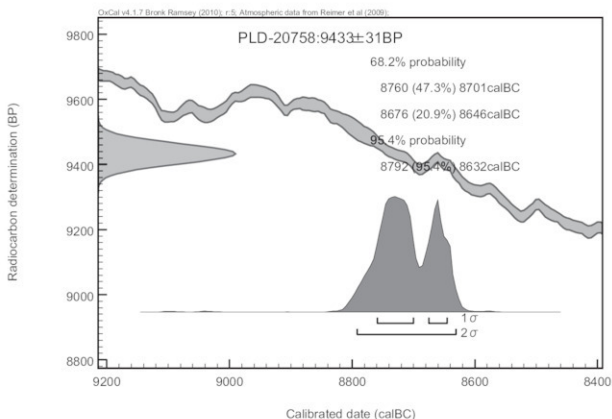
第 30 図 試料 No.1 暦年校正曲線グラフ



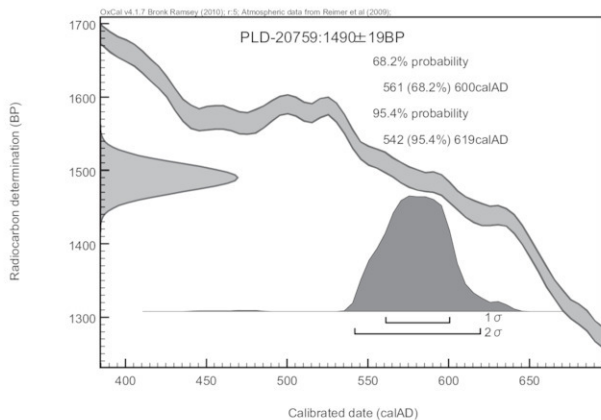
第 31 図 試料 No.2 暦年校正曲線グラフ



第 32 図 試料 No.3 暦年校正曲線グラフ



第 33 図 試料 No.4 暦年校正曲線グラフ



第 34 図 試料 No.5 暦年校正曲線グラフ

第VI章 総括

第1節 須長10号墳

愛知県新城市の須長古墳群において、10号墳及びその周囲の調査を行った。須長古墳群全10基の中で、発掘調査が行われるのは当10号墳が初めてである。ここでは、調査区の中で主体となる10号墳を中心として、今回の発掘調査における成果を述べ、まとめた。また、

調査区内では、須長10号墳、竪穴建物跡、土坑などが検出された。この中で、中心となる須長10号墳は、近隣の古墳10基でくくれる須長古墳群に属している。



第35図 須長古墳群位置図

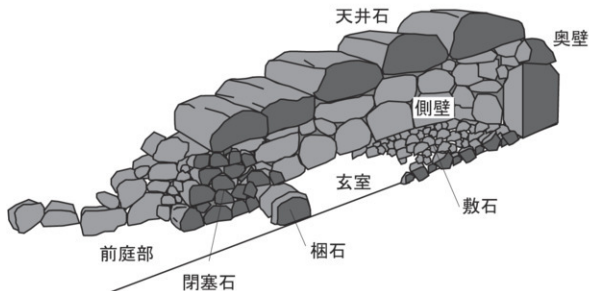
須長古墳群 須長古墳群は、新城市須長地区に所在する古墳を一つの群としてくくったものであるが、これら10基の古墳は同一の丘陵上に連なっているわけではない。須長1～10号墳は、丘陵別に分けると4グループに分けられる。このうち、雁峰山の南裾に展開するのは、1～4号墳（須長字道久保）である。4グループの中では、数が最も多い。須長地区の中心集落内にかつての存在は確認されたが、現在は全て滅失している。須長1～4号墳の位置する山裾の南側には、連吾川、大宮川によって谷が形成されている。須長5、6号墳（須長字亀井戸、字松葉）は、須長1～4号墳の東側で、連吾川によって形成された谷をはさんだ対面の丘陵上に位置する。須長7、8号墳（須長字山崎）は、須長1～4号墳直下の谷をはさんだ南側対面の丘陵上に位置する。須長9、10号墳（須長字天王）は、須長7、8号墳の東側で、連吾川によって形成された谷をはさんだ対面の丘陵上に位置する。

丘陵別に記した4グループは、それぞれを最小単位のみと見做し、限定的には捉えられるが、限定された墓域に密集しているわけではない。こうした位置関係で、10基全体を小支群なり一つの群として捉えるには、まとまりに欠けている。群としてのまとまりを考えるためには、それぞれの古墳についての実態を比較し、築造の継続性も含めて検討する必要がある。しかしながら、この中で考古学的な調査例は今回の10号墳のみであり、他の9基は実態が不明である。愛知県遺跡分布地図・東三河地区版では、分布図に1～4号墳の滅失が図示され、一覧表では1、3、9号墳の備考欄に滅失と記されている。9号墳は、今回の調査地点にも隣接しているため何度となく現認を試みたが、古墳を

示す材料は得られなかった。したがって須長古墳群とされる 10 基は、半数となる 1～4、9 号墳が滅失し、10 号墳以外の調査成果、記録も無いため、各古墳の墳丘、石室規模、副葬品等の実態から群としてのまとまりを検討することができず、最小単位の 4 グループ間の結びつきは明確に捉えられなかった。須長 10 号墳は、須長古墳群全 10 基の中では南東端に位置する。

墳形 須長 10 号墳は円墳で、墳丘の形状は南北径がわずかに長い楕円形を呈する。古墳の規模は、周溝底部からみた東西径 12m、南側前庭部と北側周溝底部間で 14m を測る。列石の一部と思われる角礫が、墳丘頂部北側に十数点、長さ 3.6m にわたり検出された。周溝は、立地する斜面の下部にあたる南側を除き、馬蹄形に巡らされている。墳頂部付近の南北断面観察では、南側から北側に向かって盛土が行われ、さらに東西断面観察では中央から東側に向かって盛土が行われた後、西側を盛り上げ、その後に東西交互に盛りながら全体を積み上げた様子が見られる。周溝を掘削し、これによって発生した土にて盛土を行い、墳丘を調整して築造したものと思われる。墳丘の中央から南側では、盛土が石室天井部まで削平された痕跡が認められたため、石室を覆う部分の築造に関しては正確な工程が明らかにできなかった。

埋葬施設 須長 10 号墳の埋葬施設は、横穴式石室を内部主体とする。墳丘中央部には長方形と思われる土坑が有り、その南側でこれを切って墓壇が掘り込まれている。これらの土坑、墓壇は、いずれも基盤層を掘削して設けられている。石室の築造は、墓壇を掘削した後に基底石を配し、壁面を積み上げながら裏込めし、天井石まで積み上げられている。石室天井石は奥壁側の二石を残して消失しているため、削平された痕跡から、この二石以外は抜き取られた可能性が考えられる。石室の主軸は、S—3°—E を測る。全長は 6.6m で、南向きに下る斜面にて、開口部はほぼ真南に向いて設けられている。



第36図 須長10号墳石室模式図

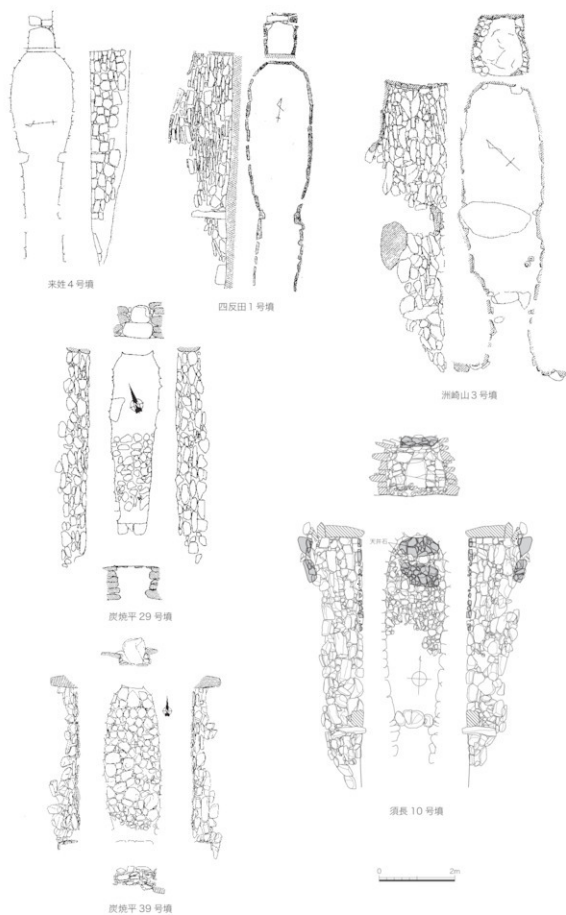
須長 10 号墳における石室の構成は、立柱石一対を伴う単室で、開口部までの側壁にて天井石の有無を断定することができないため、羨道の有無、位置が不明瞭であった。玄門部の立柱石は、わずかに側壁より内側に突出し、疑似的な両袖を形成している。玄室入口付近は、開口部に向けて床面がわずかに上がっていて、框状の段構造はみられず、立柱石間には廻石が据えられている。玄室の平面形態は、最小幅が立柱石間、最大幅が玄室中央より奥壁側に位置し、両側壁はわずかに弧を描き、奥壁に接続する部分で急激に幅を窄められている。胴張り形とも奥窄まり形とも捉えきれず、折衷的な状況がみられる。天井の構造は明確に判断できないが、側壁の残存状況などから玄室奥壁側がもともと高いものと推察する。奥壁は、大型石材（縦長石）が 1 石据えられている。石室の全長は 6.6m、玄室長は 5.0m、玄室の最大幅は 1.6m である。

折衷的要素 須長 10 号墳における石室の構造から、類似例に目を向けてみる。須長 10 号墳の石室の構成は、先述したように折衷的で単純ではないため、代表的な類型に適合させられない。須長 10 号墳の構成要素の中で、共通する要素がなるべく多いものをあげて、類似例として検討する。

須長 10 号墳の所在するのは、愛知県でも東部に位置する三河地区であるが、その中の東西区分では東三河地区にあたる。これと隣接する西三河地区においては、森泰通氏が終末期古墳の横穴式石室を、3 類型に大別している（森 1999）。すなわち、奥壁の形状と側壁の形状から、細長胴張り形、奥窄まり胴張り形、奥窄まり長方形、の 3 類型である。これらは、古墳の横穴式石室奥壁が、終末期に至ると小型化することに伴い、奥窄まり形が生まれ、胴張り形はやがて長方形化してゆく変遷を想定してのものであった。須長 10 号墳は、小型化した奥壁に伴って側壁は奥窄まりになっているが、玄門部に向かう側壁は直線状ではなく、わずかに胴張り形で狭くなっており、長方形化していない。したがって上記の分類では、須長 10 号墳の石室は、奥窄まり胴張り形、ということになる。

第 37 図では、石室の平面形態において側壁の幅に変化が認められ、奥壁に接続する部分にて幅が窄められているものを例示した。いずれも、折衷的な要素が認められる。西三河地区に所在する来姓 4 号墳（豊田市）、四反田 1 号墳（豊田市）、洲崎山 3 号墳（旧幡豆町、現西尾市）は、奥窄まり胴張り形の例として示されたものである（森 1999）。この 3 基は、狭い玄門部から側壁が緩やかな弧を描き、小型化した奥壁に向かって曲線的に接続する。奥壁への接続状況は、須長 10 号墳と近似しており、石室の最大径が玄室中央より奥壁側に位置することも共通する。東三河地区に所在する炭焼平 29、39 号墳は、炭焼平古墳群（旧一宮町、現豊川市）に属する古墳である。7 世紀後葉と報告される炭焼平 29 号墳は、石室内の奥壁寄りでは敷石が認められず、床面の敷石状況は須長 10 号墳とは逆である。石室は、入口付近から奥壁に向かって直線的に幅を広げ、奥壁寄りの最大幅位置から徐々にではなく、急激に幅を狭めて奥壁に接続されており、図示した他の石室とは異なっている。石室の平面形態では、奥窄まり形の要素を持ちながら、長方形と胴張り形の中間的様相として捉えたい。7 世紀中葉と報告される炭焼平 39 号墳は、玄室ほぼ全体に敷石が施され、石室の平面形態は入口から奥壁に向かってゆるやかな胴張りを呈するが、奥壁の直前で急激に幅を狭めて接続されており、図示した西三河地区の 3 例とも共通性がみられる。

第 37 図に示した諸例を通観すると、須長 10 号墳は炭焼平 29、39 号墳と違い、羨門の立柱石があり、石室入口部分の段構造はみられず、玄室の敷石は入口側ではみられない。来姓 4 号墳、四反田 1



第 37 図 石室比較図 (1:100)

号墳、洲崎山3号墳と違い敷石はみられるが、炭焼平39号墳のように玄室部のほぼ全面に敷かれているわけではなく、炭焼平29号墳のように玄室の入口側に敷かれているものとも異なり、玄室の奥壁寄りに敷かれている。例示したものは、こうした差異は認められるものの、袖部の有無で分けるだけではおさまらない折衷的な要素をそれぞれ含んでいる。

森氏は、終末期古墳の横穴式石室について、細長胴張り形→同（奥壁小型）→奥室より胴張り形→奥室より長方形、という変遷モデルを想定した（森1999）。先述した諸要素を考慮した上で、図示した石室を比較すれば、来姓4号墳、四反田1号墳、洲崎山3号墳、炭焼平39号墳のような奥室より胴張り形から、奥室より長方形へと更に変遷し始めた形態が、炭焼平29号墳、須長10号墳、と大きく捉えられるかもしれない。森氏は、終末期の横穴式石室は、明確に形態分離しているとは言い難い、として混在の可能性を示唆している。須長10号墳は、石室の最大径が玄室中央より奥壁側に位置し、この位置から急激に幅を狭めて奥壁に接続されている。こうした石室の平面形態から須長10号墳を判断するならば、森氏の想定する変遷モデルでは、終末期における横穴式石室の最終段階ではないが近いもの、とすることができようか。なお、折衷的な様相の認められるこれらの横穴式石室については、それぞれに細かな差異が存在し、基準とする点をしばって分類設定することが難しい。したがって、周辺における類例を比較してグループ化し、その分布状況を検討する、と言った作業については断念した。

追葬 須長10号墳では、石室内にて検出された副葬品と思われるものは須恵器の長頸壺1点のみで、奥壁が窄まる部分の床面から検出された。前庭部からは、閉塞石の開口側端部から外側の床面にて、須恵器の坏蓋7点、坏身10点、有台坏1点、高杯10点、土師器甕1点が出土している。前庭部出土遺物は、土師器甕を除いて、石室内出土の長頸壺とは明確な時期差が認められなかった。古墳全体の出土品では、周溝の上、下層などから石室内、前庭部出土遺物よりかなり新しい時期の遺物も出土しているが、追葬の検討として取り扱うべきものとは考えていない。須長10号墳では、石室内、石室外出土遺物の時期的位置付け、前庭部の遺物出土位置、状況などを検討材料とすれば、追葬行為の可能性は低いものと思われる。

古墳近接の遺構 須長10号墳の周溝西側には、検出された外縁から約5mの位置に堅穴建物と考えられる遺構103SIが検出され、その南側には更に同様の102SI、101SIが検出された。これらの堅穴建物跡は、斜面と同じ南北方向に、近似した間隔で並んで位置する。3棟の主軸は、概ね南向き斜面に合わせられて設定されたものと思われる。出土遺物から判断する時期は、古い順に北側に位置する103SIが猿投竈編年のH-50併行期に相当するものと思われ、次いでその南に位置する102SIが猿投竈編年のI-17併行期、さらにその南側に位置する101SIが猿投竈編年のI-17～I-41併行期に相当するものと思われる。須長10号墳についての年代観は後述するが、石室内出土遺物で唯一時期的な判断ができるものは、猿投竈編年のI-17併行期と考えられる長頸壺である。したがって出土遺物から判断する103SI、102SI、101SIは、須長10号墳築造時期前後に存在した堅穴建物、と捉えざるを得ない。近いものではわずか5mほどの距離で、古墳築造に前後して堅穴建物を構築した意図が注目される。

第2節 年代観

須長 10 号墳調査地点では、古墳とその周辺で検出された竪穴建物、土坑などの遺構、出土した遺物について、調査、分析記録をもとに報告を行った。その中で、時期の推察できる情報を抽出し、整理した上で時間的位置付けを行ってみたい。

築造時期 須長 10 号墳について、その特徴とするところを最初に列記してみる。

前節では石室の構造から、終末期における横穴式石室の最終段階ではないが近いもの、と想定するに至った。しかし、これはあくまでも段階を想定したものであり、年代観と言えるものではない。そこで、出土遺物から判断できる年代により、築造時期について想定しておきたい。

須長 10 号墳では、石室内から出土した副葬品と思われる遺物は、須恵器の長頸壺 1 点のみであった。この長頸壺は遺物の章にて、在地産（ここでは近在の生産地である湖西、豊橋等を含む）で、猿投窯編年の I-17 期に併行する時期の製品と想定した。その根拠は、肩部が丸みを帯びて張らない断面形態からすると、猿投窯編年の I-41 期に併行する時期まで下がることは無い、と判断したからである。各窯式の時期について、絶対年代への同定は現時点でも確定しているとは言えず、研究者によって諸案が検討されている状況である。ここで述べる猿投窯編年は、「城ヶ谷 2010」に依拠する。

石室内では、時期を判断できる出土遺物が長頸壺 1 点であったのに対して、前庭部にて出土した遺物は遺存度の高いものが 29 個体を数えた。前節にて、須長 10 号墳では追葬行為の可能性が低いことを指摘した。これらの前庭部から出土した遺物は、墓前に据え置かれたものと思われる。この前庭部出土遺物と、石室内出土遺物との時間的な比較をすることで、埋葬とその後、についてさらに想定してみたい。前庭部出土の須恵器は、遺物の章でも述べたように、猿投窯編年の I-17 期に併行する時期の製品と考えられる。一定量の坏蓋、坏身、高杯などは、形態的特徴にはっきりした時間的な差異がみとめられない。こうした石室内、前庭部出土遺物にみる時間的特徴は、横穴式石室の形態的特徴から想定される段階とも矛盾しない。追葬行為の可能性も低いとするならば、石室内および前庭部出土遺物は、築造年代を表示しているもの、と考えて良いのではないだろうか。すなわち、横穴式石室の変遷モデルの中では、最終段階ではないが近い時期であり、城ヶ谷編年に照合すれば 7 世紀後葉といった時期に比定できるのではないだろうか。

第3節 まとめ

最後に、調査によって得られた成果をふまえて、須長 10 号墳の歴史的位置付けに付いて検討し、今後の課題と問題点を考えてみる。

造営母体 須長 10 号墳は、どのような集団によって造営されたものであろうか。須長古墳群は、先述したように 10 基で構成される。これらは須長地区に所在する古墳をくくったものであって、10 号墳を除けば時期を始めてとしてその内容は一切明らかにならず、これらの造営母体が同一であったかどうかは不明である。ここでは、年代観において想定した須長 10 号墳の築造時期から、周辺の同様な時期と考えられる集落遺跡に目を向けてみる。

須長 10 号墳から西に約 600m の位置には、石座神社遺跡が所在する。弥生時代後期から古墳時代前期を主体とするが、8 世紀代と推定される竪穴建物跡、掘立柱建物跡も検出されている大規模な集落遺跡である。3 年度にわたり発掘調査が行われ、調査成果の詳細は報告が待たれるが、拠点的な集落であることは確実である。この集落遺跡の南側には、丘陵上に連なる断上山古墳群が所在する。この古墳群は、南端に前期と推定される古墳を含むが多くの後期の円墳と考えられており、その造営母体を石座神社遺跡の当該期集落に想定することは自然であろう。

須長 10 号墳から丘陵を西に約 200m 下った位置には、石岸遺跡が所在する。この遺跡も石座神社遺跡と同様に弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡が検出されているが、8 世紀代と推定される竪穴建物跡、掘立柱建物跡も検出された集落遺跡である。現時点では、須長 10 号墳から距離的に最も近い位置にて確認された集落跡である。先に述べた石座神社遺跡へは、この位置からさらに西側の支丘および、連吾川によって形成された谷を越えて丘陵に登らなければ到達しない。石座神社遺跡、石岸遺跡ともに、調査成果の報告が完了していないため、ここでは詳細な時期的な言及ができない。しかし、両遺跡にて 7 世紀後葉という同時期に集落が営まれていたとしても、位置関係を考慮するならば、須長 10 号墳の造営母体は石岸遺跡の当該期集落である可能性は、否定できないであろう。

須長 10 号墳を位置付けるためには、須長古墳群とされる現存の周辺古墳について、さらに周辺の集落遺跡についても、時期的な把握が必要であろう。すなわち造営期間の把握は、古墳群の盛衰を予測することになり、集落の盛衰を把握することは、造営母体となる集落を比定することにもつながる。これらは、検討材料として現時点においては決定的に不足しており、調査成果の報告も含めて資料の増加が待たれる。須長 10 号墳の所在する位置は、豊川によって形成された河岸段丘面から山地にかかる、山地への入口であり、山地からの出口である。資料の増加により、須長 10 号墳のような地理的環境にて集落が営まれ、古墳の造営が続いた歴史的背景を明らかにしてゆくことが、今後の課題となるであろう。

参考文献

- 須川勝以 1988 「東三河の横穴式石室について」 『三河考古』創刊号 三河考古刊行会
- 三河考古学談話会 1994 「東三河の横穴式石室 資料編」
- 森 泰通 1999 「西三河の終末期古墳小墳」 『三河考古』第 12 号 三河考古学談話会
- 尾野善裕 2000 「旗投資（系）須恵器編年の再構築」 『須恵器生産の出現から消滅』 東海上部研究会
- 費 元洋 2000 「古代湖西窯編年の再構築」 『須恵器生産の出現から消滅』 東海上部研究会
- 須川勝以 2001 「東海地方における後期古墳研究史」 『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム
- 瀬川貴文 2001 「群集墳研究の現状と課題」 『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム
- 三田敦司 2001 「三河における後期古墳の動向」 『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム
- 鈴木一有 2001 「東海地方における後期古墳の特質」 『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム
- 岩原 剛編 2002 『稲荷山古墳群』 豊橋市教育委員会
- 須川勝以編 2004 『庚焼平古墳群』 一宮町教育委員会
- 城ヶ谷和広 2010 「土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」 『愛知県史 資料編 4』 愛知県史編さん委員会



調査区全景(南東から)



調査区俯瞰(右が北)



調査区全景(西から)



調査区全景(東から)



001SZ伐栽前(南から)



001SZ伐栽後(南から)



001SZ表土除去(南東から)



001SZ表土除去(東から)



001SZ表土除去後(南東から)



001SZ表土除去後(東から)



001SZ表土除去後(西から)



001SZ表土除去後(北から)



001SZ表土除去後(南から)



001SZトレンチ掘削(北から)



001SZトレンチ掘削(南から)



001SZ墳丘南北断面1(西から)



001SZ墳丘南北断面2(西から)



001SZ墳丘南北断面3(北西から)



001SZ墳丘南北断面4(北西から)



001SZ南面石材検出(南から)



001SZ周溝南西部礫検出(南から)



001SZ周溝南西部遺物検出(東から)



001SZ周溝北東部遺物検出(西から)



001SZ石室検出(北から)



001SZ石室前庭部遺物検出(南から)



001SZ石室前庭部遺物検出(西から)



001SZ石室前庭部遺物検出(東から)



001SZ石室前庭部遺物検出(南から)



001SZ石室天井石検出(南東から)



001SZ石室天井石下東西断面(南から)



001SZ石室閉塞石(北から)



001SZ閉塞石(南から)



001SZ閉塞石下段(南から)



001SZ右(西)壁立柱石(南東から)



001SZ左(東)壁立柱石(南西から)



001SZ石室転落石検出(南から)



001SZ石室敷石・櫛石検出(南から)



001SZ櫛石検出(北から)



001SZ石室奥壁長頭壺検出(南から)



001SZ全景(南から)



001SZ石室(南から)



001SZ石室長頸壺検出(南から)



001SZ立柱石検出(南から)



001SZ東西断面(南から)



001SZ旧表土・基底石検出(南から)



001SZ基底石検出(南東から)



001SZ基底石検出(南西から)



001SZ基底石検出(北から)



001SZ墓坑(南から)



001SZ墓坑(北から)



調査区西壁断面(東から)



101SI東西断面(北から)



101SI南北断面(西から)



101SI遺物検出(北から)



101SI遺物検出(東から)



101SI遺物検出(東から)



101SI(西から)



102SI南北断面(東から)



102SI東西断面(南から)



102SI(西から)



103SI東西断面(南東から)



103SI南北断面(北東から)



103SI遺物検出(南から)



103SI(南から)



104SK断面(南から)



105SK断面(北から)



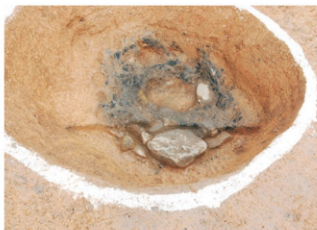
107SK集石検出(南から)



107SK断面(南から)



107SK炭化物検出(南から)



107SK下層(南から)



作業風景(南から)



作業風景(南東から)



石室撮影状況(西から)



小学生の見学(北西から)



001SZ俯瞰(上が北)



1



2



3



4



5



6



7



8



10



12



13



14



17



18



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



31



33



38



39



51





前底部出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すながじゅうこうふん
書名	須長10号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第184集
編著者名	松田 訓・パレオラボ株式会社
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567-67-4161
発行年月日	西暦 2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すなが じゅうこうふん 須長10号墳	あいちけん しんしゅう 愛知県新城 し ぶちが あさ 市須長字 てんのう 天王	23221	76215	34° 55' 36"	137° 31' 45"	2010/1/5 ～2010/3/30	1200	第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
須長10号墳	古墳ほか	縄文	古墳	須恵器・土師器	
		～古代	竪穴建物	灰釉陶器	

発掘届出(21埋セ第69号 2009.9.30) 発掘許可(21教生第1437号 2009.10.9)
終了届(21埋セ第153号 2010.4.2) 発見届(21埋セ第154号 2010.4.2)
保管証(21埋セ第156号 2010.4.2) 認定(22教生第546号 2010.6.11)

要約	<p>本遺跡は古墳時代終末期の古墳を中心とする遺跡で、横穴式石室構造の円墳1基と竪穴建物3棟、土坑等が確認された。円墳の規模は直径約12mで、周溝が南側を除いて巡る。石室には花崗岩が使用されており、全長約7m、幅約1.5mの横穴式で、天井石は奥壁部2石を除いて消失。前庭部では須恵器高杯、有蓋杯等が集中して検出された。検出された土坑の中では、出土炭化物の放射性炭素年代測定にて、縄文時代早期前葉の値を示すものも含まれた。本遺跡は、丘陵上に展開する遺跡群に含まれているものと思われ、周辺の集落遺跡を含めた実態を解明する上で、貴重な資料として位置づけることができる。</p>
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第184集

須長 10号墳

2014年3月31日

編集発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社

